

銃弾は曲がらないと誰が言った？

ヒヤッハー猫

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

銃弾は曲がらない？ そんなこと誰が言った？ 現実では不可能？ なら、仮想世界なら可能だろ。

目次

First	bullet	1
Second	bullet	12
Third	bullet	21
Fourth	bullet	29
Fifth	bullet	36
Sixth	bullet	43
Seventh	bullet	53
Eighth	bullet	60

First bullet

目を閉じたくなるような細かいフラッシュと風を切る音。何か小さい物が高速に自分の周りを通り過ぎていく。

それが約二十メートルの距離から『AK-47』と呼ばれるアサルトライフルによる銃撃による物だと理解したとき、既に近場の遮蔽物へと身体を滑り込ませていた。

「Shit! ouch out out where!?!」

至る所に廃墟跡が残るフィールドで壁だけ残された遮蔽物を背にして敵の攻撃を凌ぐ。

まるで西部劇から出て来たような恰好をしたプレイヤーは特徴的なハットを抑えながらそう呟く。

周りを見れば仲間の一人が逃げ遅れ粒子になっていく様を見て歯を食いしばる。今の所生き残っているのは自分を含め四人、そして――

「Be cool」

そうやってきたのは少し離れた場所の遮蔽物で同じように隠れている仲間、否、今回依頼した助っ人だった。

全身黒のライダージャケットのような服装で、左の太ももにはサバルナイフが一本と右の太ももには予備マガジンが付けられている。

そして、まるで銃のメンテナンスをするかのように落ち着いた動作で手持ちのハンドガン『イマニシー7』の安全装置を解除し、スライドを引いた。

頭部を全体的に覆ったガスマスクのようにも見えないヘルメットギアから紅く光る双眸がこっちを見る。

「Partner is only three people」

あの一瞬で人数を確認したことに驚きを覚えつつも、一体全体この危機的状況をどうやって乗り切るのだろうか？

何とか知り合いの伝を借りて有名なギルドのメンバーを借りるこ

とが出来た。だが、数的有利でも敵はこの道のプロだと思われる。それに対してこっちはまだ初めたばかりの初心者が固まっただけのパーティー。

先手は取られ頭を出そうものなら直ぐに撃ち抜かれる。このままジツと待っていて側面を取られて終わりだ。現に助っ人の人物は遮蔽物から頭を出そうとしてはそこにすぐさま銃弾が通り抜ける。

「Do is only for a moment!」

助っ人はそれだけ言って少し前の遮蔽物へと移った。何かを狙っているのは分かるが一体何をすべきだ？

それに、さっきの言葉……様は一瞬でもいいからこっちにヘイトを集めろということだろう。しかし、相手はとっくの最初から気が付いている。自分たちがまったく脅威に成り得ない存在だと。故に、こっちには銃弾が飛んでくることは無い。

他の仲間もそれを分かっているが身体を遮蔽物から出すことを出来ずにいた。ふと、手に持っている短機関銃を見る。皆でモンスターを倒しドロップした品だ。

初めて強い銃を自分たちの力だけで手に入れることが出来た。相手はこれを狙ってやって来たに違いない。

たった、これだけの為に。自分がやられてもドロップするとは限らないと言うのに。

それをこのまま使うこと無くやられるぐらいなら――

「I'm gonna do it! I mean it!!」

勢いよく遮蔽物から飛び出し短機関銃を連射する。着弾予測円の縮小なんて気にせずマガジンの中に入っている弾を打ち尽くすまでトリガーを引き続けた。

そして、敵の一人が銃口をこっちに向け弾道予測線が表示される。隙は作った。後は助っ人に全て任せる。

「Good job」

たちまち弾道予測線が解除される。それは自分を狙った敵がやら

れデータの屑に変わっていく所だった。前を見れば彼は動いていない。

なのに敵は倒れている。あの角度からではどうやっても狙えるはずも、ましてや当てることなど不可能だ。

だが、彼はそれを可能にしてみせた。

次々と遮蔽物の後ろに隠れている敵に銃弾を当てて、あぶり出した所をヘッドショットを決める。最後の一人に関しては何も出来ずやられていった。

銃弾を曲げるといふバカげた離れ業をして。

？

『Gun Gale online』。通称GGOと呼ばれる従来のVRMMORPGとは違って剣や魔法ではなく、銃器を主軸としたゲームだ。

対人戦闘は勿論のこと対モンスター戦闘も盛んだ。その従来とは違ったコンセプトのおかげでたった八ヶ月で人気を博したゲーム。何もそれだけが人気の理由ではない。

このゲームは『ゲームコイン現実還元システム』というゲームで稼いだ金銭を現実の電子マネーとして還元できるのだ。

そのため、トッププレイヤーになると月二十万から三十万をも稼ぐことが出来る。

そして、彼もまたそのトッププレイヤーの一人……だったのだが。

今は、ボケーっと青い空——では無く。自宅がある方角を見ている。自宅と言っても家庭の事情でアパートを借りて一人暮らしをしている。そつち見ながら思ったことはただ一つ。

「今日の夕飯どうすつかなあ……」

午後、学校が終わりである喫茶店の中でそう呟いた。別にお金が無いから食材など買えないわけではない。寧ろ、お金に関しては親から毎月余るほど送られてくる。

実際、自分の家庭は裕福な方だ。海外で暮らしていたときは家に家政婦さんがいたほどには。

そして、母親の心配性もあってお金が多く送られ、たまにその家政婦さんがアパートを見に来る。心配してくれるのは嬉しいがもう高校二年生になる。

だから、すこしぐらい子供離れをしてくれてもいいと思う。毎日のメールの八割が母親からなんて恥ずかしいものだ。

先ほども少し言ったが自分は少し前まで海外、アメリカのロスアンゼルスで過ごしていた。そこでまあ色々あったのだが割愛していいだろう。何の面白味無い話だ。

とにかく、こここの高校を入学してから日本に住み始めた。最も、日本には何度も足を運んだことがあるのでそこまで気苦労はしなかった。

向こうと比べるとまだこっち日本の方が暮らしやすい。ただ、自分も純粋な日本人だが……育った環境が違うからか。ここに暮らしている人たちを見て思ったのだが、危険に対する意識が無さすぎる。

いつ、どこで、何が起きるか分からないというのに。身を守る道具すら持たないとは恐れ入った。まあ、あっちに比べたら治安がいい方なので余り意識してないのだろう。

手元のカップに手を付け中身を呑もうと口に近づけて、それが空だと知って店に掛けられている時計を見れば約束時間を十分ほど過ぎていた。

「菊岡さん、遅いな」

あの人が時間に遅れるなど珍しいことがあったものだ、と思っていると入店を知らせるベルと共にスーツ姿の男性が姿を現した。その人物がこちらに気が付くと笑みを浮かべて一直線にこちらに向かってくる。

「いやー、ごめんね。遅れちゃって」

男性——菊岡誠二郎は苦笑いをしながら真正面に座った。そして、ウェイターに自分の分の飲み物と空になった俺のカップを見て追加で飲み物を頼んだ。

「すみません、ありがとうございます」

「いいよ、こっちの方が悪いんだし。ブラックで良かったよね？」

「ええ、はい」

菊岡さんは一息ついて所で身体を前に出しニヤついた表情をする。

「どう彼女は出来た？」

「彼女って…… いませんよ」

「ふーん、でも青春したいから今行っている高校に入学したんでしょ？ わざわざ士官学校の方を切って」

「うっ、それは…… その……」

それを言われ言葉を詰まらせる。そう、本来なら自分は自衛隊の士官を育てる高校へ行く予定であった。しかし、折角の高校生活を遊びたいという理由で滑り止めで受かったこの高校へ入学したのだ。

その時、菊岡さんにはお世話になっており、その恩を無下に扱ってしまったと言っても過言ではない。

その時、別に防衛大からでもいいか、という軽い気持ちで辞めてしまった自分を殴りたい。そもそも防衛大を舐め過ぎである。

……が、良くやったと褒めたいほど今の高校生活は楽しかった。しかし、やっぱり昔からお世話になっているので結構後悔していた。それは、今の高校を中退してまた受験しようと考えていたほど。

「お父さんには良くお世話になったし、その妻でもある君のお母さんには頭が上がりなくてね。僕もよく料理を振る舞って頂いたよ。あれはおいしかったなあ……」

「……」

ニヤニヤとしている所を見るとワザとで言ってきたのは分かりきっている。しかし、どうすることは出来ない。

菊岡さんが気が済むまでイジられるのを耐えるでしょう。あの時の分が返って来たと思えば安いものだ。

「いや、ごめんごめん。でも本当はお母さんから息子のそういった話を聞いて欲しいと言われてね。やっぱりそういうのは親子では聞き難いのかな？」

お母さん……。アンタの差し金かよ。てか、それ一年生の夏休み終わったところからずっと似たようなこと聞いているよね？

余りにも何も無いからって他の人に話すかよ普通。菊岡さんも菊岡さんで何故その話を受けたんだらうか。

「もう勘弁してください」

と、言った所で注文した飲み物が来た。そろそろ本題に入つて欲しいと思いつながら注文されたコーヒーを口に運ぶ。菊岡さんも満足したのかアタツシユケースから薄型のタブレット端末を取り出した。

「まあ、無駄話はここら辺で。早速で悪いんだけど……『ガンゲイル・オンライン』。知っているよね？」

……。まさか、菊岡さんからその単語を聞く日があるとは。

「勿論、知ってますよ。自慢になりますけど、何たって俺はトップギルド——」

「——『Frater^ラnity^ニ』の設立メンバーの一人……。だったかな？」

「……。ご存知なら、わざわざこんなこと聞かないで下さいよ」

GGOに置いて言わずと知れたトップギルド。それが『Fratern^ラity^ニ』だ。総メンバーはたったの五十人という他ギルドに比べて圧倒的に少ない数で構成されている。何故、そんな人数しかないのか？ 加入する条件が厳しすぎるからだ。

加入条件はただ一つ、実力を見せるだけ。ただそれだけだ。

その加入申請がピークの時は一週間かかったほどだ。その時の申請数の数が約五千人近くで合格したのがたったの三人という批判待ったなしの合格者数だった。

しかし、それでも減る傾向は無い。何故ならトッププレイヤーの上位が殆どうちのギルドが占めており、誰が言い出したかは知らないが

加入すればある業を覚えれると言われていたからである。

最も、それはそう簡単に手に入るわけが無く、加入しても手に入るなど現実には甘くはない。寧ろ、野良の方が確立は高いかも知れないほどだ。

まあ、自分はそのトップギルドの設立に直接関わったプレイヤーだ。長では無かったが。

「そんな事まで知っているのなら、もう自分がやっていないのをご存知では？」

そう、日本に来てから自分は一度たりとも触っていない……あの世界にダイブしてないのだ。理由はとてもしようもないので人には話したことは無い。

「まあまあ、そんなヤケにならないで。これを見て欲しい」

やっとタブレット端末を使ったと思って見せて来たのは、ある男性のプロフィールだった。眼鏡に太った顔周り。おまけに首まで伸びた髪を見れば、自分からしてあまり良い印象を受けない人物だ。

「先月、十一月の十四日。東京都中野区某アパートで、掃除をしていた大家が異臭に気が付いて、インターホンから電話を鳴らしたが返事が無い。しかし、部屋の電気は点いている。そこで電子ロックを解錠して踏み込んだらこの男性——茂村保しげむらたもつ二十六歳が死んでいた。死後五日半だったらしい。部屋は散らかっていたが荒らされた様子はなく、遺体はベットに横たわっていた。頭にアミュスファイアを付けたままね」

「アミュスファイアを？」

自分のアパートのベット近くで埃をかぶっているかも知れない、金属リングを二つ重ねたヘットギア型フルダイブ機器を思い浮かべる。

「ああ、死因は急性心不全となっている」

アミュスファイアを付けたまま心臓が止まった。ありそうな話だが自分は一度も聞いたことが無かった。事例にダイブし過ぎで栄養失調に陥ったヤツがいたらしいが。

「大方、栄養失調じゃないですか？ それか光過敏性癲癇が原因とか………は無いか」

それなら彼はゲームなど出来るはずがないだろう。今頃、ゲームとは無縁な生活を送っていたはずだ。栄養失調なら先ほども例を挙げたが日本では余り聞かない。

「こういう変死はニュースにもならないし、家族もゲーム中に急死なんて話はしてほしくないだろうしね。これはある意味、VRMMOによる死の浸食だよ」

「なるほど……それでこのケースの何処にGGOと関わりが？」

まさか、呼び出しておいてVRMMOの在り方を話しに来たわけでもないだろう。

『MMOストリーム』というネット放送局の番組を知っているかい？

なんでも彼は十月に行われた、最強者決定イベントで優勝したそう
だ」

「へえ、それはスゴイ。それは第二回のBullet of Bulletですか？」

「さあ、そこまでは」と言っただけで口を持ってくる菊岡さんを見ながら思い出す。第一回ではナイフとハンドガンで暴れた経験があるので少し悪いことをした気持ちがある。何故なら、そのせいなのか第二回からは海外から参加出来なくなり、日本サーバーでしか参加できなくなったのである。

「話を戻すけど彼はそのネット放送局で『ゼクシード』の再現アバターで出演中に突然落ちたらしい。多分、その時に心臓発作が起こったんだろう」

ここまでの情報を一般人である自分に公開しているということは何かしらある事件の可能性があると予想しており、尚且つ、それを解決もしくは情報を集めろといった所だろうか。

「もしかして一人のプレイヤーが画面に向かって銃を撃つたことに何か関係が？」

その発言に菊岡さんは驚いたように固まる。GGOから離れている自分が知っていたことに驚いたのだろうか。

「偶にそういった類の動画とか掲示板を見るんです。ほんのちよつと話題になってましたよ」

それはほんの気まぐれだった。頭のおかしいヤツがいる、というニュアンスの題名と共に音声ログが再生されたものだった。何も考えず見ていたが何故か印象に残っていた。

「なら話は早いね。問題はその時間だ。日本標準時のカウンターにも記録されていてね。その人物がテレビに映っているゼクシード氏に発砲したのが、十一月九日午後十一時三十分二秒。ゼクシード氏が突如落ちたのが、十一時三十分五秒」

「……偶然には出来すぎていますね」

「君もそう思うかい？」

「ええ、彼が優勝したのであれば必ず妬まれたり恨まれていても可笑しくはない。初めて撃たれてデスポーンした時、思わず撃たれた箇所をまさぐったことはありますが、撃たれたショックによる心臓発作はあり得ないでしょう。」

仮にもGGOのトッププレイヤー、撃たれ慣れてないわけがない。それに対して、それはゲームの中のテレビに映っているキャラクターを撃った。そして、その直後にそのキャラクターはゲームから強制ログアウトしたわけですね。明らかに狙ってやっている。その時間帯で似たようなことがあったのなら話は別ですが」

自分の質問に菊岡さんは首を横に振りながらタブレット端末を操作する。

「いや、確認は出来なかった。それに、もう一件似たような事件があるんだ」

さつきと似たように全く見たことの無い男性の顔写真と共にプロフィールが書かれている。

「約十日前、十一月二十八日。埼玉県さいたま市大宮区某所。またもアパルト一室で死体が見つかった。死因は心不全だ。これもアミュスフィアを付けたまま絶命していた。アミュスフィアのログを見る限り十一月二十五日午後十時零分四秒で途絶えてる。死亡推定時刻もそのあたりだね」

「それもまた銃撃を？」

「そう。彼はそのときギルドの集会に出ていて壇上で檄を飛ばしてい

たところを、乱入してきたプレイヤーに銃撃されたらしい。町の中だったからダメージが入ってないが、怒って銃撃者に詰め寄ろうとしたとき急に落ちたらしい。これもネットの掲示板からのものだから正確さは無いけど、銃撃した者は同一犯だと思うよ」

「やはり、ソイツも裁きを受けろ、とか言つて？」

「そうだね、そしてその後にはキャラクターネームを名乗っている……『シジユウ』それに『デス・ガン』」

「これまた大層な名前をいったものだ。しかし、死銃——Death gun^{デスガン}か。死銃に撃たれたものは現実でも死に至るといったところか。しかし、本当にあり得る話なのだろうか？　そこである事件を思い出す。

「菊岡さん、SAO事件の時みたいなに脳を破壊？　焼く？　とにかく、そんな風にアミュスファイアを使って現実の身体にダメージを与えられるんですか？」

「これも菊岡さんは首を横に振った。

「……アミュスファイアにはそもそもそれほどのパワーの電磁波は出せない設計だし、脳にダメージならともかく心臓を止めるなんて出来ないよ。あの機械に出来るのは視覚や聴覚といった五感の情報を、ごく穏やかなレヴェルで送りこむことだけと、開発者たちは断言している」

「開発者がそういつているのなら装置自体に問題は無いのだろう。まさか、自分自身でその装置、すなわちアミュスファイアを弄ったわけでもあるまいし。」

「事件と思っているが確証が無いし証拠も無い……なら実際に死銃に接触してみればいい。そういうことですか？」

「菊岡さんは苦笑いをした。

「理解が早くて助かるよ。でも危ないな、その思考に直ぐ至るのは」
「……別に」

視線をカップに戻して残り少ないコーヒーを飲む。それはもう冷えていて余り美味しくなかった。

話事態は受けてもいい。しかし、一度離れたあの世界にまたダイブ

するのか……。

「実はもう一人頼んでいるんだ」

「……は？」

悩んでいた自分を察してくれていたのかは知らないが穏やかな口調で語り掛けて来る菊岡さんは少し困った表情をしながら言った。

「別に受けなくてもいいさ。そのもう一人の援護に回ってもいいし、陰ながら支えるって手もあるからね。っと、言っても君は有名過ぎるから、陰ながらは無理だね」

もう一人、というかあの菊岡さんの話を聞いて受けた人がいることに驚きを隠せずにいる。

自分は昔から知っているから問題無いが、初めてあったら確実に警戒度マックスで対応されそうな人だというのに。

しかも、話を聞く限りGGOに関してはやったことも無いビギナーなのは確かだ。良く頼んだもんだと思う。

それほど信頼できるプレイヤーなのか、それともダイブに異常な適正があるのか…… まあ、ある意味いい機会なのかも知れない。

「——いいですよ。受けます。日本で本格的に『Fratenity』^俺の名前を売ってやりますよ」

もう一度、あの世界へ。

長年染み付いた雨水によってまだらな薄墨色に染まるコンクリートの階段を上る。二つめのドアが、詩乃が独りで暮らすアパートの部屋だ。

しかし、そこへ行く前に一つ目の部屋の前で買い物袋を持った男性が電子ロックを解除している所で鉢合わせた。

「——あ、先輩」

「ん？ ああ、朝田か」

男性——先輩は「よっ」と言っつて片手を上げた。薄い茶髪に長身でがっちりとしている体躯が制服に上からでも分かる。何度も黒染めをして来いと言われているはずだが、一向にしてこようとしない。何でも向こうでは普通なんだとか。

向こうとはアメリカのことで高校へ入学するまでアメリカに住んでいたらしい。だが、もうこちらに来て一年経つのだからいい加減、日本に合わせるべきだと思うのだが…… 何度言っても聞きはしないだろう。

「あれ、珍しく料理するんですか？」

「おい、珍しくはないだろ。てか、ここ最近お裾分けしただろうが」
そう茶化すと先輩は苦い顔をした。対照的に私はくすつ、と笑った。その時の肉じゃがはとても濃くて私の口にはちよつと合わなかった。

その事を正直に言うのと唾然としていたのはいい思い出だ。先輩にしてはとても薄くしたらしい。

あれでとても薄いなんて…… 少し先輩の味覚を疑ったほどだ。でも、その肉じゃがは何だかとても温かったことは印象に残っている。

「それで、今度は麻婆豆腐を作ろうと思うだが意外と難しそうなんだよな……」
——おい、朝田？ どうした？」

「えっ？」

急に怪訝な表情をしてじつ、とこっちを見る先輩の視線に耐え切れず俯く。会話の中で何か心配されるような雰囲気を出してしまっただろうか。

しかし、もう迷惑は掛けられない。いや、掛けたくない。学校では無くなったけど、今日のように学校以外でやられたりする。今回はたまたま新川くんに助けてもらったけど、次は無いだろう。

また先輩に助けてもらうのは嫌だ。あの時みたいに泣きつくのは嫌だ。だから私は心に蓋をした。そして、取り繕い、今できる笑顔を顔に張り付ける。

「大丈夫です。ちょっと疲れただけですから」

そう言っ先輩の隣を通り過ぎて自分の部屋の電子ロックに鍵を差し込んで四桁のパスワードを打ち込み鍵を捻る。

「じゃあ、また」

「…… ああ、またな」

笑顔で言う先輩の顔を見ると心が痛い。先輩の笑顔はもつと違う人に向けるべきだ。私みたいな――

ゆっくりと扉を閉じた。

？

子猫のような印象を受ける後輩を見送って自分も部屋に入る。彼女と出会いは隣に引越して来たということで挨拶に来たのが最初だったか。

まあ、挨拶してすぐ戻って行ったので、その時は特に印象に残って無かった。

それから少しして彼女が同じ高校だということに気が付いたのは

五月ぐらいだろうか。いくら何でも学年や帰る時間が違うからと言って一ヶ月ちよつと知らなかったのは我ながらスゴイと思ったものだ。

それから、また少し経ったある日。やけに一年と思われる女子生徒がこのアパートに出入りしてるもんだから気になると、どうやら隣に越してきた彼女の部屋に入り浸っていたことが分かった。

その時、彼女には悪いと思ったが変な奴等とつるんだな、と思った。そして、またある日。テストが近い中、隣でどんちゃん騒ぎをしているのか知らないが、こっちはテスト勉強——主に国語——を必死にやっております。

今、冷静に考えれば軽い不応侵入にあたるだろうか。部屋を出て静かにしてもらうように軽く言ってやろう扉を開けて外に出れば自分の部屋の前で立ち尽くす彼女と目が合った。

怯えたように足を震わせ今にも泣きそうな表情をしていれば、嫌でも分かるもんだ。どうした？ と声を掛けると首を横に降るばかり。

だが、分かっている。『助けて』という声が聞こえてきたから。だから、自分は彼女の静止の声も聞かずに部屋に入り込んだ。

入ったらすぐにツンと鼻に来る匂いがした。奥まで行けば柄の悪い男と同じ学校と思われる女子生徒がアルコール飲料の缶を片手に啞然としていた。それもそうだろう。部屋の主かと思ったら大柄な男が入って来たのだから。

こっちが睨めつけていると酒臭い男が付かかって来て、周りもそれを見て嘸し立てる。男が胸倉を掴んで脅してきたが、向こうの奴等と比べたらライオンとチワワぐらいの差がある。

というのも、自分は結構長身になるので胸倉を掴まれていようと見下ろす感じになってしまっている。

まあ、だがまだ手を出すのは良くない。ただ胸倉を掴まれたただけだ。なので素直にここに来た理由を話した。

『おい、こっちはテスト勉強してんだよ。騒ぐなら外で騒げ』

と、言う相手は大爆笑。エライね、的な感じに小バカにされたので国語によるストレスもぶつける勢いで、そのまま胸倉を掴んでい

る男の頭を鷲掴みにしてギリギリと締め上げれば、笑い声が痛みによる絶叫に変わる。

これでも向こうではバスケットをずっとやっていたので握力には自信があった。

男の手が胸倉から締め上げている手首に移った瞬間を見計らって足払いをしてから、そのままフローリングに叩き付けた。

ちゃんと勢いを殺したので血は出てないだろうが顔と後頭部を手で押さえながらうめき声を上げる男。

『騒ぐなら外で騒げつつてんだよ。てか、二度と来んな』

そこからは速かった。女子生徒たちと男は顔を青ざめ、すぐさま荷物を纏めると倒れている男を引きずりながら脱兎の如く部屋から飛び出していった。

部屋の前で突っ立っていた彼女は訳も分からない表情で固まっていたから少し悪いことをしたかもしれない。

そんな彼女に頭を下げて床を傷つけてしまったことを謝ると戸惑いながらも許してくれた。それから下の階の人にも迷惑をかけたので頭を下げに行ったがどうやら出かけていたので良かった。

それから、彼女の部屋に残ったアルコール缶などのゴミと一緒に片づけながら事情を聞いた。まあ、何とか仕方ないような気もするが余り深く聞かず、もう付き合わないことをオススメする、と言うと彼女も薄々勘づいていたようだった。

今度お礼をすと言ったので、別にこっちが勝手にやったことだと断ったが、それだと気が済まないというので、折角なら料理の味見役を頼んだのが関係の始まりだった。

偶に来る家政婦の清水さんに料理を教わるが、本当に一ヶ月に一回ぐらいしか来ないので自分の料理の腕が上がったのか実感が持てなかった。なのでちよūdいと思っただのだ。

そんな感じでちよくちよく料理の味見役を受け持ってくれたり、国語以外の勉強を教えたり、国語を教えて貰ったりする関係だ。

一度、学校で彼女のことに関する噂があったが別に気にしてない、そんなの向^{アメリカ}こうでは日常茶飯事だと笑い飛ばしてやった。事実、向こ

うでは子供だつて銃を持つことが許されているのだから。

越してきた時よりは随分と顔色は良くなったと思う。だが、まだ何か心の奥に爆弾を抱えているようだ。しかし、それを無暗に突くのは良くないだろう。

彼女自身が自力で解決するか、彼女から助力を求められてから助けるべきだ。それに、どうやら同年代にマシな友人が出来たと言つたので心配しなくても大丈夫だろう。

「んじゃ、まあ…… やりますか」

チラリとベットの近くに置いてあるアミュスファイアを見る。時間を見れば軽く日本サーバーを見て回るにはちょうどいいぐらいの間はある。

本格的に依頼をやる時はあつちがバックアップをしてくれるらしいので、今回は初めて入る日本サーバーの下見といった所だ。

今日買ってきた物を冷蔵庫に入れ風呂を沸かしておく。準備が出来たことを確認し、下手をすればもう一年になるかも知れないほど触つて無かつたアミュスファイアを頭に装着する。

少し緊張していることに変な気分を覚えつつも、久しぶりに戻ることとに高揚感を抑えられない。

自然と口元を歪めていた。

「リンク・スタート」

眩いた声は新しく貰ったおもちゃで遊ぶことを今か今かと待ち望む子供のように跳ねていた。

？

その日、Zamielという名のプレイヤーが日本サーバーにログインした、という情報が大いに話題となった。それは『死銃まとめサ

イト』にすら影響を与えていた。

——やべえヤツがログインしやがった。なんでガチのガチ勢が日本鯖に来てんだよ。

——マジそれな。今回のB o B荒れるわw

——確か、第一回の優勝者ってコイツだろ？ 動画みたけどエグいわ。

——ダレか、コイツが日本に来た情報リークはよ。

——正確じゃないけど、海外鯖の方で全くログインしてなかったらしい。それで一時期は辞めたって話だったけど、その原因がメンバーの中で衝突したとかなんとか。だから海外サーバーにいつらくなくてこっち来たとか。

——ガチか。

——てか、ここ死銃まとめサイトだろw 何でザミエル考察サイトになってんだよww

——ザミエルは他のサイトでやってどうぞ。

——いや、死銃よりザミエルの方が現状どうにかすべき案件だろ。死銃って言っても確かな確証ねえし。

——そういえば、ゼクシードとたらこ現れてないな。もう一ヶ月経つんじゃない？

——マジだれかリアルで知り合いとかいたら情報投下しろ。

——だからいねえっての。スコードロンのメンバーもリアルで連絡先しらないだろうし。てか、GGGで個人情報漏らすヤツはアホ過ぎ。

——結局、死銃は誰か身体張るしかないでしょ。だから死銃さん、明日二三時三〇分にグロッケン中央銀行前で赤い薔薇を胸に刺して待ってます。

——勇者キタコレ

——いいぞ、もつとやれ。

自然とマウスを握る力が強くなる。『彼』は酷くイラついていた。どの掲示板を見てもザミエルがどうだ、ザミエルはあれだ。その話題ばかりだった。

違う、違うだろう。本来なら二人目の死を与えた時点で『死銃』の力は本物では無いか、という噂がネット上を駆け巡り、GGGプレイヤーたちは次は自分がターゲットにされるのではないかという恐怖に怯え、ゲームから引退する者が相次ぐ——ということになった。

しかし、現実では愚かなネットゲーマーたちは『死銃』の与える真の恐怖に気づかず、冗談めいたやり取りに終始、興じていた。

やはり、現実世界で『ゼクシード』と『薄塩たらこ』が事件で報道されなかったのが計算外だった。確かに都内では変死など相当数存在しており、報道されるほどの事件性は無かったようだ。

勿論、『彼』は自ら銃撃した二人に心臓が停止していることは知っている。この愚かな奴等に今すぐ事実を教えてやりたい誘惑は強烈だった。だが、具体的なソースを書き込むのは困難だし、何より『彼』の伝説性が薄まれてしまう。

伝説と言えば、GGGに置いて今ですら語り継がれている物があ

る。

『Zamiel』『Hollow』『Casper』の三人による虐殺劇だろう。あるスコードロン戦——ギルド同士によるぶつかり合いで『Fraternity』はその三人しか現れなかった。その理由は定かではない。

対するギルドの総勢は百人弱。他のギルドも混ざっているいわば連合軍のような集まりだった。誰もが『Fraternity』の負けを予期した。しかし、現実には三人による虐殺劇場。自分たちの銃弾は当たらず、あり得ない軌道——湾曲した軌道を描いて銃弾が飛んで来る。

遮蔽物から出てきたかと思っただけの遮蔽物に行くまでに三人はやられている。一度肝を抜いたのは『Kasper』による神業だろう。

飛んで来る銃弾に自身が撃った銃弾をぶつけることによって仲間を助けるなど誰が想像つくだろうか。

故に、伝説。

だからこそ今回『Zamiel』が日本にログインしたという情報が現れたときの荒れようは激しかった。タイミングが本当に悪い。

——まあ、いい。

『彼』は深く息を吐いて、自分を落ち着かせる。もうすぐ第三回『バレット・オブ・バレッツ』通称BOBが開催される。『死銃』はこの大会でさらに三人ほど消滅させる予定だ。

BOBの注目度は絶大的だ。それに今回はヤツが、伝説がきつと出て来る。その大舞台で伝説をこの『死銃』で屠ることが出来たらもう『死銃』の力を疑うヤツはいないだろう。どんな化物であろうとアレさえあれば問題ない。

アカウントは駄目になるかも知れないが、あの銃さえあれば新しい『死銃』が荒野に降り立つなど容易だ。そして、更に殺す。

『Zamiel』を殺したらきつと『Fraternity』の二人も出て来るはずだ。

何故、日本に来たかは知らないが仲間がやられれば奴等はノコノコ

とこつちまで来てくれるだろうさ。

そして、『死銃』は伝説になる。

絶対の力——魔王——最強——最強——最強——……

だが、ヤツの死は絶対だ。これらを手にするためにはヤツは絶対に殺さなければならぬ。ブラウザを閉じてファイルを開く。

縦に八人の顔写真——ゲーム上のアバターの顔写真を切り抜いて加工した物が並んでおり、それぞれ右側には使用する武器や名前など詳しい情報が記入されている。

そして、『ゼクシード』『薄塩たらこ』の写真には色が落とされ、上から赤のバツ印で被されていた。

これは『死銃』のターゲットリスト。言い換えれば、あの銃のマガジンに装填された『死の弾丸』の数だ。八人の誰もがGGOのトッププレイヤー。間違いなくその頂点に立つ『Zam^ザmie^{ミエ}l』だろう。

そのまま下にスクロールしていき一番下に配置されている写真を中央に表示させた。八人中唯一の女性プレイヤーだ。

右斜め上ぐらいの角度で撮影されたスクリーンショット。淡いブルーのショートヘア、深く巻いたサンドイエローのマフラーのせいで口も見えないのは残念だが、どこか猫を思わせる深い藍色に瞳だけでも充分に魅力的な輝きを放っている。

右側に表示された名前は『シノン』。メインアームは対物狙撃ライフルの『ウルティマラティオ・ヘカートII』。冥界の女神と称される誰もが知っているプレイヤー。

『彼』はそつと光沢パネル越しにシノンの写真を撫でた。

Third bullet

菊岡さんに頼まれた助っ人との仕事の件で呼び出されたのは千代田区にある大きな都立病院だった。別段、そう遠くないので問題無いのだが……何故病院？ と、思いながら敷地に入る。

「うわっ、デケエな」

病院を仰いでそう呟く。こっちに暮らし始めて病院などお世話になったことが無かったというのもあつてか、久し振りに見る病院を何となく大きく見えた。

もし、病院に行くような事になったら母親が飛んできそうで怖いので健康管理はもちろんのこと、危ない所には寄らないようにしていたのだが。まあ、流石に飛んで来ることは無いだろう……だよな？ 無論、今回の事は菊岡さんがちゃんど連絡をとっており問題無い。ただ、その件に関してのメールが増えたのは言うまでもない。

内心苦笑いしながらエントランスを目指して歩く。やはり見た目もデカければ内装もそれなりにあるのは分かり切っていた事実だが、実際見てみると思っていたより広い。初見なら絶対迷いそうなほどの広さだ。

キョロキョロしていたら何だか上京してきたばかりの田舎者のような雰囲気だと自分でも思ったので、そそくさに菊岡さんから送られてきたメールが示す通りに病棟の三階フロアまで来ると担当の看護師と思われる若い女性がファイルを持って駆け寄って来た。

「こんにちわ」

こっちが挨拶すると若い女性がニコリと笑顔で挨拶を返してくれた。

「こんにちわ、担当の三好みよしです。早速だけどこっちに来てもらっても

いいっつー」

「はい」

言われた通りノコノコと着いて行く。実際、タイプなのは心に留めておいた。案内され通されたのは個室の病室。ベットの近くにはモ

ニターが配置されていた。

「それじゃあ、早速やるんでしょ？　その前に電極、貼らせて貰っていい？」

「はい、分かりました」

電極など貼るなんてもう記憶に無いほど昔だと思う。いや、記憶に無いのなら電極なんて貼ったこと無いんじゃないか？　と今になって変な疑問が浮かんで来る。そんなことを考えながら上着を脱ぎベットに横になる。

「わっ、中々いい身体してるねー」

「そ、そっすか？」

電極を貼りながら三好さんは面白そうに腹筋や大胸筋を触る。冷たい指先が当たる度にこそばゆさを感じながらも内心、筋トレをしておいて心底良かったと思った。

「そう言えば、防衛大に入るんだっけ？　ならもつと鍛えないとダメだよー。あそこは容赦つてものが無いからねー」

「あ、はい。精進します……」

そう言えばこの件は菊岡さんに頼まれたものなんだから、菊岡さんと似たような関係の人が来るだろう。

三好さんは慣れた手つきでモニターを操作しながら看護病院に所属していた時に聞いた防衛大のあるあるを言いながら笑う。そして、自分はもしかしたら入る可能性のある世界の厳しさに青ざめる。

ふと、思う。そんなことを話したら自分の役職を教えているようなものだが別にいいのだろうか？

詳しいことは知らないが菊岡さんが総務省の人間では無いことは知っている。昔ながらの付き合いなのだ。それぐらいは分かるが、何故その立場で素性が分かる人間に今回のような依頼を頼んだのだろうか。

GGOに詳しく奥まで入り込めるような実力者で知り合いと言ったら自分ぐらいしかいなかったのか。それとも、上の人間が今回の事件を重く見たためなりふり構ってられないのか。

……いや、無いな。偶々、自分が都合よかったのだろう。別にバ

ラそうなんて考えてないし。それに、そういう職に就いている人には余り深く探りを入れるような発言をしては駄目だという暗黙のルールが存在するのを知っている。

まあでもそのルールは今日は適用されないだろう。三好さんも自分から話しているので問題無いのだろう。

自分についても詳しく……は無いにしろ両親のことぐらいは知っているのかもしれない。菊岡さんも分かっているだろうから少なからず情報を与えていておかしくない。

「あ、もしお母さんにあつたらよろしく言つて貰える?」

やっぱり。改めて自分の両親の顔の広さに呆れる。てか、母のことを知っているとということは会つて話したことがあるのか、若しくは部下だった可能性もある。

でも確実に自分のことは小さい頃から知っているんだろうなあ。息子の話になると口が止まらないって父が言っていたのだから。

「あ、はい。分かりました。では、そろそろ……その、お願いします」

自分が少し恥ずかしそうに言うと三好さんは、「あー、はいはい」と自分のヤツより新しいアミューズファイアを手渡してくれる。それを被つて電源のスイッチを入れた。

「これで……よしと。いつでもいいよ」

「そんなに長くは無いだろうと思えますけどよろしくお願いします」
「はい、承りました」

さっきの気軽さとは打って変わって、まだまだ小童な自分に対して敬意のある受け答えに、やっぱり現役の人なんだろうと確信を得てしまふ。

最も、三好さんも分かった上でやっているのだろう。もしくは、もう身体に染み付いてしまっているのか……。

いずれ自分もこんな風になるのか、と未来の自分を想像しながら目を閉じる。

「リンク・スタート」

コマンドを呟くと、見慣れた白い放射光が視界を塗りつぶしてい

き、自分の意識を肉体から解き放って行った。

——そう言えば、俺は誰の手助けをすればいいんだ？

一足先にGGOの世界にログインしたキリトもまた同じようなことを思っていた。

——強力な助っ人を用意したとか言ってたけどプレイヤーネームとか聞いてないぞ!?

かくして二人はお互いを知らずにGGOへと入り込んだのだった。

？

ログインして辺りを見渡す。相変わらずむさ苦しいほど男しかない。空を見れば薄く赤味を帯びた黄色に染まっている。時間的に言えば午後の二時ぐらいだろうか。

『ガンゲイル・オンライン』は現実と時間が同期しているので現実世界で夜になればこっちでも夜になる。取り敢えず暗くなる前にその助っ人する側の人間を探さなければならぬ。夜になれば人はもつと多くなるからだ。それだと見つけるのにまた苦勞する。

絞るとしよう。話を聞いた限りではその人物は『ガンゲイル・オンライン』に関しては初心者だと言っていた。なら、まだこの付近でウロチョロしているかも知れない。

そう思って明らかに挙動不審のアバターを探すが見つからない。寧ろ、こっちが挙動不審に見えてきそうだ。

ここは素直にその人物に関して誰か見てるだろうから話しかけて聞いた方がいいかも知れん。近場にいた男の肩を叩く。

「Now then mister.
Did you not watch a beginner in this
?」

あ、しまった。前のときのクセで英語で話しかけてしまった。相手も困惑したように片言の英語で訳の分からないことを言っている。

正直、これは申し訳ないことをしてしまった。そして、下見をしたのだから分かるだろう普通、と自分を責めた。

「ああ、いや、悪い。勘違いしてた。普通に日本語で話せるから少し聞いてもいいか？」

相手もほっと胸を撫で下ろし耳を傾けてくれる。先ほど、英語で喋ったことをそのまま日本語に直して話したら、少し思い出すような素振りをして指を立てた。

「ホントかどうか知らないけど、ちよつと前にF一三〇〇番だったかな？ あ、いや、M九〇〇〇型だったか。とにかく、珍しいアバターが出たって言ってたな」

「へえ、それは珍しいな」
どつちにしろ珍しいアバターだ。まあ、似たようなアバターを持ったヤツならギルドに所属していたから、そんなにこと珍しいと騒ぐことは無い。

となると、それは新規にログインしたのだろう。ならソイツが菊岡さんが言っていたもう一人なのかも知れない。

情報をくれた男に礼を言っつてその場を立ち去る。まあ、確定したわけではないがきつとソイツだ。直にあつて今後はどう動くか話し合いたい所だが、どちらにしろ『死銃』の狙う傾向としては有名なプレイヤーばかりだ。

つまり、もう既に自分はターゲットに入っている可能性が大いに考えられる。きつとソイツもどうにかして目立つやり方をするだろう。

と、なると――

「――やっぱBOBだよな。目立つならそこしか無いだろう」

『死銃』もそれに出てくるはずだ。あの大舞台でやらなくては意味が無い。皆が見ている場でやるからこそ意味があるのだ。

いい、いいな。楽しくなってきた。

下見ついでに軽く銃を握ったり撃つたりしたが、実戦でも問題無いぐらいだろう。少しバレットカーブが不安だが戦えないわけではない。それにアイツ等から饞別に貰った銃もある。それもあれば負ける要素が無い。

ゆつくりと予選エントリーのため巨大な金属の塔。総督府、通称『ブリッジ』と呼ばれる場所に歩いて行った。

「さてさて、結構集まっているな」

少し装備の選択に悩んでいたのもドーム中央のホログラムのタイマーは五分を切っている。各々、武器をチェックしたり身近な人間の言葉を交わしたり、戦意を高めたりしている。

しかし、先ほどから何人かの視線を感じ、現実世界より強化された聴覚で耳を澄ませると自分の名前が聞こえて来たので、気が付いている者がいるようだ。

やはり、予選でこの姿は不味かったか。自分が現役、言ってしまうがギルドで暴れていた時代の姿なので動画など見ている人間がいたら一発でバレてしまう。

上下一体型のライダージャケットのような真っ黒のスーツで今は装備を付けて無いが、腰に二丁掛けられるヒップホルスターに右の太ももにはレッグホルスターが掛けられている。

レッグホルスターにはグリップ部分に装飾がなされたハンドガン『イマニシー7』が下げられていた。左のホルスターには刃渡り二十センチの程のサブバイバルナイフを下げている。

無論、本来これはサイドアームだが……正直、メインアームを装備する必要はないかも知れない。傍から見たらそこまでレベルの高いプレイヤーは数えるほどだ。

少し、気になるのはあちらのボックス席に座る二人の女性プレイヤーと銀灰色の長髪の男性プレイヤーが睨み付けるように見て来るのだ。

特にパールブルーの短髪で顔の横で結っている女性プレイヤーが怖い。今にも撃つてきそうな勢いで睨み付けてきている。その二人を見てオロオロとしているキレイな黒の長髪の少女が可愛らしかった。

そのとき、その黒髪の少女と目が合ったが、突然、荒々しいエレキギターによるファンファーレが轟いた。

遂に始まるB.O.B。久し振りの戦場で高鳴る高揚を抑えるのに必死だった。自然と口角が上がる。

「It's show time!」

？

『大変長らくお待たせいたしました。只今より、第三回バレット・オブ・バレット予選トーナメントを開始いたします。エントリーされたプレイヤーの皆様は、カウントダウン終了後に、予選第一回戦のフィールドマップに転送されます。幸運をお祈りします』

ドーム内の拍手と共に歓声が沸く。しかし、喧騒の中、俺は一瞬こつちと目が合った『Zamier』というプレイヤーが気になっていた。

シノンが言っていた実質GGOナンバーワンプレイヤーと名高い実力者。その日本人離れした顔立ちでこつちと視線があった時、少し笑ったように見えたのだ。

『強力な助っ人を用意している』

菊岡から余計なお世話が書かれたメモの最後に書かれていた言葉。もしかしたら、と思うがまさか無いよな？ 大体、彼は海外で活躍していたと言われている。だとしたら海外の人間にわざわざ日本サー

バーに来てくれと頼むだろうか。

というか、助っ人を用意しているならソイツに頼んだらいいだろう、とメモを握りつぶす力が増したのは言うまでもない。

ただ、ほんのちよつと彼がその強力な助っ人であるように期待を込めてみたが……先ほどから横の殺気がヤバイ。助っ人候補が今にもシノンに殺されそうだ。彼から視線を外すと、俺に右手の人差し指を突きつけた。

「決勝まで上がってくるのよ。その頭、すつ飛ばしてやるから」

俺も腰を上げ、にやり笑った。

「デートのお招きとあらば、参上しないわけにはいかないな」

「こつ、この……」

進行していた二十秒のカウントダウンがゼロに近づき、俺はシノンに手を振ってから、転送に備えようと前を向いた。そして、じつとこちらを見るシユピーゲルと目が合った。

その鋭い目に、警戒と敵意の色が見えた。

これはちよつとやり過ぎたかな、と思つた束の間、俺の身体を青い光の柱が包み込み、たちまち視界が真っ白になった。

Fourth bullet

目の前には薄赤いボローウインドウがあり上部には、対戦相手のプレイヤーネームと自分のネームが表示されている。

今は準備フェーズ。指定された場所は今まで見たことなかったが、特に問題ないだろう。

メインアームを『イマニシー7』に設定し、サイドアームには何も装備しないまま待機する。

正直、嘗めていられると言われてもおかしくはない。

しかし、これが自分のプレースタイル。寧ろ、自分がどういったプレイヤーか知っているのなら本気で来ているということに気がつくだろう。

戦場において、ほんの一瞬油断が生死を分ける。ここはただの仮想空間だが、言い換えれば戦場に最も近い場所だ。

擬似的な戦闘を味わい、最初なら擬似的な死すらも味わうことも出来る。ゲームごときに大袈裟な、と思うかも知れないが日本では実際にデスゲームとなった。

それが、今まさにこの『GGO』で起ころうとしている。死銃の登場によって、よりリアルな戦場になった。撃たれば死。文字通り死が待っている。

故に、全力……と言いたいところだが、予選で切り札を出すほど弱いわけではない。過去の情報であれば今の自分は万全の状態で見えているように見えるだろう。

しかし、それはこの装備で全力を出すと言うことだ。

実際、日本に来てから一度も触ってなかったわけではない。こつちに来てから最初で最後と思って、あちらでやり残していたことをやり遂げるために一度触った。

それは、自分を——『Zamie』を完成させること。

カウントがゼロに代わり、転送エフェクトが身体を包む。そして、次に視界に入ったのは錆び付いた大きな鉄塔が中央に鎮座しており、その周りには網目上に配管のようなものが囲っていた。

大きな鉄塔に千切れた配線が巻き付いている所から、送電施設と考えていいだろう。と、本来ならこんな悠長にフィールドの詳細を考えている場合ではない。

しかし、フィールドを把握するのは重要だ。そのフィールドには必ず基となる物がある。つまり、このフィールドは送電施設を基としている。

ならば、自分の知っている送電施設で一番酷似している立地を探す。

……送電施設などそんな詳しく見たことは無かった。

とはいえ、一見複雑そうであるがちゃんと規則性のある並びになっている。そして、何よりもシステム上、転送されてから前方の百八十度以内に敵も同じように転送される。

日本のサーバーで有名なプレイヤーの情報には目を通したが、相手のプレイヤーネームはその情報には入っていなかった。

が、相手が有名じゃないからと言って油断するのは危険である。もしかしたら、その相手が今回の試合で有名になる可能性もある。

誰しも最初は無名だ。だからこそ、そこから有名になるのだ。

姿勢を低くしながら、壁際に沿って少しずつ中心の鉄塔を目指す。もし相手が背後を取るために大回りして来るとしても、中心である鉄塔に向かっていれば視界に入るだろう。

中心だからこそ、周りを見るのに最適だ。自分にとって全方位は視界内だ。

足音、風の吹きかた、息づかい、視線、武器を構える音、布が擦れる音、そして、何よりも――

――カチャン、と言う音が二時の方向から聞こえてきたと同時に一

瞬、光つたと感じた瞬間すぐさま左に飛び込んで身体を鉄塔の下の土台に潜り込ませる。

相手の銃から発射された弾丸が配管に当たる。そして、発射音と弾道の大きさ。それに集弾性に高さから反動が低い物。となると、どうやら相手は短機関銃——サブマシンガンまたはSMGと呼ばれる銃を使っているようだ。

流石に名称などは判別できないが種類だけでも分かっただけで十分だ。相手もすぐこちらを視認、つまり狙える場所まで回り込んでくるはずだ。

素早く立ち上がり後ろの配管が集まって壁のようになった遮蔽物へと下がる。その間にも何発か撃たれたが、当たらなかつた。いや、弾道予測線が見えたため避けたと言った方が正しいだろう。

自分はAGI型と呼ばれる俊敏性が突発しているスタイル——ではないが、まだ五十から三十メートル近く離れている場所から撃たれても回避できるぐらいの能力構成にはしている。

どちらかと言えば、自分はAGI型に近いDEX型だ。スキル等も回避から判断力、視野の拡大、足音を極限にまで小さくするなど、正面切って戦うタンク系ではない。

寧ろ、VITやSTRには殆ど振ってない。まあ、STR《筋力》に關しては昔に比べると増えたが。

そこで何故、ハンドガンしか使わないのか？ その疑問が解消されただろう。ただ、重火器が持てないからだ。下手をすれば自動小銃——アサルトライフルすら持てないかもしれないほど。

しかし、だからこそ使えるものがある。その一度当たれば死んでしまうような耐久性を選び、よりリアルを体感しているプレイヤーに贈られたスキルが。

相手の位置は把握している。後は環境だ。風は吹いてない、視界も悪くない。身体の状態は——絶好調だ。

上半身を傾け遮蔽物から出して相手のいる遮蔽物に向かって撃つ。こちらを見ていた相手プレイヤーはすぐさま頭を引っ込めた。否、引っ込めてしまった。

一旦、撃つのを止めて銃を持っている右手を後ろに引く。そして、大きく肩から右腕を振りながらトリガーを引いた。

今頃、相手は困惑しているだろう。

何故、隠れているのに弾道予測線バレット・ラインが表示されているのか。

——何故、その赤い線は曲がっているのか。

遮蔽物に背中を合わせて一息する。目の前にはコングラチュレーションと言う文字が浮かび上がっていた。予定より早く終わつたが、本選に出場する実力者ならもう終わらせているだろう。

そして、見ていただろう。この戦闘を。何より、死銃がこれを見れば間違い。

転送エフェクトが全身を包み、湧き上がる歓声が聞こえて来ると共に待機エリアへと戻って来た。何やら『チート野郎』と言う声がチラホラ聞こえてきたが気にしない事にする。

何も不正はしていない。寧ろ、これは公式で存在するスキルだ。不正であれば弾道予測線バレット・ラインが表示されるわけがない。

それに、まだ日本サーバーにはいないがきつと直ぐにもこれを使うプレイヤーは現れるだろう。まあ、増え過ぎたら修正されて欲しいスキルランキング、堂々の一位に輝く未来しか見えない。

まあ、このスキルを発現させるまでが一苦労どころじゃないだろう。絶対に手に入る代物ではない。故に、たったの三人しか使えないのだ。

すっかり聞きなれた言葉を受け流して、近くのバーカウンターに腰を下ろした。ふと、視線を中央のホログラムから、正面に切り替えると予選が始まる前に目があった黒髪の少女の姿だった。

しかし、始まる前とは打って変わって膝を抱えて顔を俯けていた。敗北した、と思ったがそもそも敗者はここに転送されない。なら、あの落ち込んでいる……いや、恐怖している？ とにかく、何かあったのかと声を掛けるべく腰を浮かせたそのとき。

黒髪の少女に近づくとペールブルーの髪——シノンと呼ばれるプレ

イヤーが声を掛けた。

彼女もまた日本サーバーにおいて有名なプレイヤーであった。もしかしたら友人同士で参加したのかもしれない。

そんな所に知らない人間が顔を出すのは無粋だろう。というか邪魔だ。

そんな彼女たちのやり取りを見て、視線を外した。もしか、と思っただが彼女が助っ人するべき人物では無いだろう。流石に菊岡さんに女性プレイヤー…… それ以前にこういったことを頼める女性の知人を見たことが無い。

まさか、もう敗北してここにいないんじゃないか。と脳裏を過ったが、そのときはそのときだ。それに分からない以上、今のところは一人で進むしかない。

本選に上がれば自ずと分かるだろう。目的は死銃の正体を探る事だ。

腰を上げる。次の試合が始まろうとしていた。

？

シノンには自分の待ち時間に一戦だけキリトの試合をモニターで観戦する機会があった。あの待機ドームで見せた時の姿とは大きく違い。

彼の戦い方は鬼気迫るとでも形容したくなるほどの、捨て身の特効戦法だった。アサルトライフルを連射する敵に対して、小さなハンドガン——それはシノンが進めてファイブセブンで応射しつつ光剣を持って突進。

アバターの末端部に命中する弾丸は無視し即死となる弾丸、つまり致命弾だけ光剣で防御するという離れ業をやったのけて、ゼロ距離ま

で接近しアサルトライフルごと切り捨てた。

そんな戦い方をするプレイヤーは第一回、第二回といなかった。待機ドームに広がるどよめきの中で、シノンもまた目を見開いた。

あの調子ならキリトもFブロックの決勝まで上がってくる可能性は十分にある。しかし、あんな無茶苦茶な戦い方をする相手に、自分はどう戦えばいいのか。

また、ドームの中で湧き上がる歓声とどよめき。見てみれば映っていたのは黒一色の上下一体型のライダースーツを着たプレイヤーが、また銃弾を曲げて相手を倒した瞬間だった。

聞くところによるとまるで見せつけるような戦いかたらしい。そこまで自分が最強であることを誇示したいのだろうか。

…… そうだ、彼もいた。キリトだけでない、第一回のBOB優勝者で圧倒的な実力を見せた彼もいるのではないか。警戒するべき者は他にもいる。

彼の前では遮蔽物カバなんて無いにも等しい。隠れても無駄だ。しかし、それだけでは無い。ただ曲がる弾道を撃てるから最強ではないのだ。最も警戒すべき部分は彼のプレイヤースキル。

どうやって場所を把握している？

戦闘の反応速度は？

銃を構えるまでの速度は？

どう動けば相手を翻弄出来る？

どこをどう撃てば相手を追い詰めることが出来る？

その全てがスキルやステータスだけでやっているわけではない。そもそも弾道予測バレット・サークル円は本人の心臓が大きな要因となる。つまり現実の心臓の鼓動によつて着弾点が大きく変わる。

百発百中で当てるなど稀である。彼も百発百中とは言わないが命中率が高い。通常でも当てるのが難しいのに曲げて当てるのだ。化物具合が良く分かるだろう。

だとしても、いや、そうだとしても私がすることは変わらない。初

弾で決める。ただソレだけだ。

その試合を頭の中で組み立て、スコープ越しに見える黒い影。その影の頭部に狙いを澄まして静かにトリガーを引いた。

最強と呼ばれるプレイヤーを倒すことが出来れば、私は――

「……いつそ車から降りて走れば、予測線を見て避けられたかもしれないのに」

黒い影の頭部を撃ち抜いた、のは頭の中であって本来はH M W W Vハ M ヲ ヴと呼ばれる四輪装甲車両の側面の小さなウインドウを撃ち抜いた。

出て来る様子が無い所から車の中で絶命しているようだ。そのまま黄昏色の空にコングラチュレーションの文字が浮かび上がった。

試合時間、十九分十五秒。準決勝、突破。

Fifth bullet

予選トーナメント決勝Fブロック。

光剣で銃弾を弾きながら戦うといった前代未聞の戦闘スタイルで注目を浴びている黒髪の少女、キリト。冥界の女神と称される凄腕のスナイパーであるシノン。

その二人が十メートル離れた距離で相対する。

先に決勝戦を終わらせ、どのプレイヤーが本選に出場するのか確認するため待機ドームに戻ってくると丁度その試合が中継されていた。

キリトは左手に弾薬を指に構え、右手は光剣を。対してシノンは対物狙撃ライフルの『ウルティマラティオ・ヘカートII』を立ったまま構えた。どうしてそんな状況になったかは分からないが、まるでウエスタンの決闘のようだ。

たったあの距離から対物ライフルの狙撃を躲す——若しくは光剣で弾くなど普通に考えて不可能。しかし、キリトはこれまでの試合が物語っている。

それすらも弾くことが出来ると。

だが、今までキリトが体感した試合の中でもこの距離で、しかも対物ライフルの銃弾だ。弾速も威力も桁が違う。もし弾けたとしても光剣の耐久が持つのだろうか。

これは流石に自分でも無理だ。カスパールだとしても銃弾を捉えられるのが精一杯だろう。そこから銃弾を防ぐ、躲す、など不可能だ。

——しかし。

不可能と思えば思うほどやり遂げたくなる。

絶対無理だと言われたほうがやる気が増す。

誰もがこの状況で無理だと笑うだろう。そして、シノンが勝つと。

だが、自分はキリトが勝つと思う。いや、思わせてくれる。自分も似たようなことをした。だからこそ彼女はやってのけるだろう。

不可能を可能にする瞬間を。

そして、キリトの左手にある弾薬が指で弾かれた。ゆっくりと長く感じる時間で落ちていく。

キン。

という音を響かせた瞬間、ヘカートから轟音とオレンジ色の炎が迸ると共に凶弾が発射された。それはキリトのアバターを貫き――。

「――マジかよ」

映像に映っているのは斜めに振り上げられた光剣を構えているキリトと腰を下ろしたシノンの姿だった。

やってみせた。不可能を可能にする瞬間を。ゾクリつと背中に冷や汗のようなものを感じる。

しかし、冷や汗を掻いているとは裏腹に身体が昂っていた。

正直言つて、まだ日本の『GGO』プレイヤーのレベルは低い。だが、こんなことをするヤツは海外にもいないし、見たことも無い。

これまで何百人と人知れぞれ特徴のあるスタイルを持つプレイヤーたちと戦ってきた。追い詰められたこともあった。

だが、ここまで化物染みた反射速度を見せるヤツは初めてだった。

「これは……下手したら死銃どころの話じゃないかもな」

死銃が彼女を狙う、狙わないは別としてもこれほどインパクトがあったのだ。きつと、警戒はするだろう。

そして、何よりも。もし、自分と彼女が鉢合わせしてしまった場合。

自分が負ける可能性が高い。自分は近距離、中距離戦が土俵であるが、近接は土俵ではない。戦えるのは戦えるのだが、ここは銃の世界だ。誰が剣などという近接戦闘を想定して戦うだろうか。

能力構成も近接などに多く振っている訳でも無く。使えても精々ナイフと投げナイフぐらいか。

それに、彼女の前ではバレット・カーブなど無に等しい。アレは遮蔽物があるからこそ意味がある。不意を突くからこそ効果が出る。

真っ直ぐ突っ込んでくる相手に対して、曲げる弾を撃った所で意味が無いだろう。それならまだ真っ直ぐ撃った方がいい。

と、なれば。

死銃を調べるところの話では無くなる。その前に彼女に対する対

策をしなければならぬ。

長遠距離狙撃、いや、アレを持って歩くとなると大幅に移動速度が落ちる。それに、アレはフィールドの端から端までを撃ち抜くような距離で無ければ、如何せん精度がダメだ。

倍率が高すぎるが故に近距離はほぼ狙いにくい。

なら、もう接近させないような立ち回りをしなければならぬ。今は、思い浮かばないが本選までに考えるしかないだろう。無論、鉢合わせにならないのが一番だろうが。

……一応、菊岡さんに思っていたより難しい依頼になりそうだと伝えておこう。

？

恭二と公園で話し、出た所で別れた。詩乃は自宅へと急ぐ。BOBの大会まで少し時間があるがその前に銃のメンテナンスや装備の確認にあてるなどの時間が欲しかった。

途中コンビニエンスストアはミネラルウォーターと夕食がわりのアロエ入りヨーグルトを買おうと商品に手を伸ばそうとして、いきなり肩を掴まれた。

「きゃっ!?!」

咄嗟のことで驚愕と恐怖が頭を占める。しかし、肩を掴んだ人物は慌てたように直ぐ離れた。恐る恐る、振り返って顔を確認しようとする前に聞き慣れた声が聞こえて来た。

「わ、わりい。名前呼んでも気づかなかったから……痛かったか?」

「せ、先輩……?」

申し訳なさそうにこつちを見下ろす、茶髪で一見ガラの悪そうに見

える先輩がいた。

私の悲鳴にも近い声で注目されてしまい、先輩の悪そうな見た目もあって通報されかけたコンビニエンスストアを直ぐ立ち去り、アパートが一緒の先輩と帰ることになった。いつも私は一歩下がった所を歩く。

先輩はさっきの件の事を思ってたか、買おうとしていた物を奢ってくれた。自分も買っていたのでまた料理でもする気だろうか。

料理で思い出したが、もしお裾分けをあつたらあらかじめ断つておこう。ダイブ前にあまりしつかりと胃にもものを入れるのはいくつかの理由によって望ましくない。それを伝えると先輩は苦笑いをした。「あー、そう？　まあ、今日は別に凝つたもん作る気は無かつたしな。軽めの物で済ませる予定だったし」

そう言つてビニール袋を持ち上げて見せる。そこには野菜を中心というかサラダ系の料理が入ったパックが詰まっていた。

「珍しいですね、先輩がそれで済ませるって」

「今日ちよつと用事があつてな。着替えたらずぐ出ないと行けないからさ」

「そう、なんですか」

ちよつと、残念と思つた。

……… 残念？　なんで先輩がいないと残念だと思ふのだろうか？

ふと、さきほど新川さんと公園で話していたことを思い出す。

『シノンはあるな凄い銃を自在に操つてさ…… GGOではもう、最強プレイヤーの一人じゃない。僕、あれが朝田さんの本当の姿だと思ふな。きつと、いつか、現実の朝田さんもあなれるよ』

そのとき思っていた私のこと。『今の私』のこと。

でも、どうだろうか。

今の私と『今の私』。

先輩と関わりを持つてから、笑い合つたり、騒いだり、言い合つたり、冗談を言つたり…… あの時の感情は一時的なものだったの？

久しく笑ってなかった私を心の底から笑わせたのは誰だった？

みんな避けてきた私に手を差し出してきたのは誰だった？

何かあったとき助けてくれたのは誰だった？

グロツケンの街道であった初心者の少女を見かけた時、世話を焼いたのは、あの時の私と重なって見えたから。その中身が男と知ったときの怒ったのは、その正直なところだったり、人を小バカにしたような態度が少し先輩と似てたから。

でも、それじゃあ、私はまるで――。

「――朝田？ 着いたぞ」

「え、あつ……………」

名前を呼ばれて顔を上げればいつものアパート前だった。薄墨色に染まるコンクリートの階段を上り、二つめのドアの前で私が止まり、先輩も自分の部屋の扉の前で止まる。そして、いつものようにいうのだ。

「じゃあ、また」

「…………… ああ、またな」

笑顔を浮かべる先輩。変わらないこの毎日だけど、私が強くなって一歩踏み出せば…………… 並んで帰れたらいいな、と思う。

朝田と別れてから、すぐ買ってきたサラダを食べ私服に着替える。時計を見ればそろそろ約束の時間だ。部屋の戸締りをチェックし、問題無いことを確認したら部屋を出て扉をロックする。

階段を下りれば黒の車が止まっていた。その車の前の席に乗り込みシートベルトをした。

「わざわざ休日なのに…………… すみません。清水さん」

ラフな格好で如何にも専業主婦のような妙齢の女性がニコリと笑みをこぼしながら車を発進させる。

「別に問題ありません。このぐらいのことなら」

小さい頃からお世話になった家政婦さんだ。海外に住むことになっても清水さんは自分の家に努めてくれた、漢族総出で恩義がある人だ。

「坊ちゃんの生き生きとした姿を見たら、何だかこっちも元気を貰いますよ」

「そんなにこっちに來てから落ち込んでました？」

「そうです、ね。やはり前に比べると少し」

そうだったのか。清水さんとは、自分では気が付かないことも気が付くほど長い付き合いになる。ある意味、第二の母親と言っても過言ではないほど。

しかし、生き生きとした、というのはいい意味ではあるんだろうが……まさか、死ぬかもしれないスリルを味わっているからとは口が裂けても言えそうにない。

そんなことを言えば母親が文字通り飛んできそうだ。また、変な事を考えていると目の前に病院が見えて來た。

「と、ここで大丈夫ですよ」

「分かりました、では気を付けて」

病院の駐車場まで行かず、入口で下ろしてもらおう。そこから、昨日行つた道を通り三階の病棟まで一直線に向かった。昨日と同じ病室に入ればもう三好さんが機材のチェックを済まして、待っていたところだった。

「やあ、やあ、最強プレイヤーくん。待ってたよ」

「……なんすか、その言い方」

また菊岡さんから変なこと吹き込まれたのかな……。あ、また聞いてないな、助っ人の件。まあ、別に気にしないでいいだろう。

三好さんと世間話を交えながら準備していく。後はアミユスフィアを被るだけだ。

「それじゃあ、後はよろしくお願いします」

「了解しました。ちゃんと見てるからね」

そう言う三好さんに自分の携帯端末を取り出し渡した。

「もし、朝田」つていう子から連絡あったら外してもいいんで叩き

起こしてください」

三好さんは不思議そうにしながら携帯を受け取った。

「別にいいけど……もしかして、彼女さん？」

「何でそうなるんですか……違いますよ」

「本当に？」

クスクス、と笑う三好さんを後目にしてながらアミューシアを被る。リンクする前に一度、情報を頭の中で整理しよう。

今回の大会で最も警戒すべきはキリトと呼ばれる彼女。鉢合わせないようにしながら動くのは後半に連れて難しくなるだろう。なら、会った場合、つまり戦闘になったときの対処法はもう考えついている。負ける気はない。

キリトというプレイヤーのせいで少し予定がズレたが、本来の目的は『死銃』だ。実際、目的さえ達成できれば今回は優勝しなくていいと思っっている。

優勝出来ないのは少し悔しいがそのためなら敢えて目立つような戦い方をするつもりだ。

それに、自分はもう『Frater^フernity^ニ』には入っていない。傷が付くのは自分の名だけだ。

今さら傷が付こうが付くまいがどうでもいいと思っっている。

ただ、これが最後で良かった。こんなにも昂る戦場で終われるのだから。

この大会が終われば自分は――

――Zamielは消える。

S i x t h b u l l e t

第三回B o Bが始まる三十分前。

出場者リストの上から順に名前を確認し『死銃』というネーム、若しくは、近しい名前を探していく。

しかし、余りにも不効率な上に確証が得られない。そもそも『死銃』に関する情報が少なすぎる。

容姿。プレイヤーネーム。有名なプレイヤーなのかどうか。何時頃からG G Oをプレイしているのか。

何万人、何十万人というプレイヤーの中から探し出すのはとてもじゃないが無理だ。

もつと絞り込めるような情報があれば話は変わってくるだろう。

一つ気になる点と言えば…… 出場者リストの中にとっても見覚えのあるプレイヤーネームを見た気がするが見間違いだろう。

アイツが来ているわけが無いし、来たとしても予選トーナメントで顔を出すだろう。そもそもアイツは海外にいるはずだ。

予選トーナメントでも戦闘の中継は見えないし、姿も確認できなかった。

だからこそ、アイツじゃない。そう強く頭の中で区切りを付ける。少し不安を覚えながら歩いていると、見覚えのある黒髪の少女——キリトとシノンが何やら話し込んでいた。

そうだ。まだ人に聞いたりしてなかった。キリトはともかく日本サーバーにおいて長くいるであろうシノンなら、何か話が聞けるかも知れない。

しかし、予選であそこまで睨まれていたから無視されそうだが、試合が始まる前に集めた情報と彼女が持っているかも知れない情報が、もしかしたら『死銃』を特定するのに値するピースの一つかも知れない。

女性を引き込めるような話術なんてものは無いが、試合前の情報交換みたいなものだと思わせれば何とかかなるかも知れない…… 多

分。

少し緊張しながら近付こうとしたときだった。前に割って入る人物がいた。

「How are you? Zamiel」

思わず絶句した。

固まった自分を引きずるように人気の無い場所まで連れ込んだのは、ブロンドの美しい髪を無造作に後ろに流しただけの女性プレイヤーだった。

彼女は近くにあるベンチに腰掛けるように顎で命令する。渋々と言った形で真ん中に腰を下ろすと、舌打ちをしながら横にズレろと、いう意志表示を表情に出す。

端正な顔付きから染み出す怒りの表情は現実の彼女の顔を彷彿とさせた。

素直に横にズレると荒々しく横に座る彼女。チラリと時間を確認すると、試合が始まるまでの時間は話すぐらいなら余裕が出るほどあった。

こう無言なのが一番心苦しいのとさっさと終わらせたいこともあり、率直に聞きたいことを聞くことにした。

「なあ、なんでお前……日本のサーバーにいの？」

「……」

しかし、彼女は足を組み堂々とした態度を崩すことはなく、ずっと正面を見て黙っているだけだった。

「……まあ、この際お前がどうやってこっちに来たのかは別にいい。だが何の狙いがあつてここにいる？ まさか、わざわざ文句を言う為に来たのか？ それなら試合が終わってから聞くからさ」

やはり、反応は無くただ黙っているだけだった。

「はあ、なんだよ。言いたいことがあると言えば言えよ。前見たいに」

何度か彼女がこういう風になったことがある。しかし、それは現実

世界の話であってこんな風に仮想^G世界では初めてだった。

GGOではトッププレイヤーとしてのプライドがあったからだろう。

それに、前はすぐ彼女は言いたいことをいった。それは成長した証拠であつたし、自分がこの世界を通じて色んなことを伝えられたことが出来た証拠でもあつた。

だが、これでは前に逆戻りだ。彼女はもう自分がいなくとも大丈夫だろうと思つていた。仲間も友人も『Frater^ラnity^ニ』もあつたというのに。

しかし、こうしてわざわざ追つて来て、更には試合にも出てきた。恨んでいるのか。それとも、何かを伝えるために来たのか。彼女のことがかつからなくなつた。

こうして頭を悩ませていると彼女は立ち上がつて何も言わず歩いて行く。

「お、おい！ ホント何なんだよ!？」

その自分の荒上げた声に反応したのか、それとも元からそのつもりだったのか。彼女は立ち止まり背を向けたまま言った。

「決着」

「は?」

「まだ決着が付いてない。だからアンタに勝つて私が最強の座を貰う。悪魔^{ザミエル}を消し去つてやるから」

そう言つて、彼女は待機ドームへと向かつて行つた。

思わず啞然として間拔けな表情をしたが、言葉をよく理解すると自然に笑いがこみ上げて来た。

「……何だ、言うようになったじゃん。――」

――『Casper^{カスパー}』

何の偶然か。Zamie^{ザミエ}とその悪魔に魂を売つたCasper^{カスパー}が出会つたとき、もう一人の仲間は運命と言つていた。

もし、これも運命だと言うのなら。

「悪いが勝つのは悪魔だ」

本当に人を殺せるかも知れない死銃。自分と並ぶ腕を持つカスパー。更に今まで見たこと無い戦い方を見せるキリトに有名な日本プレイヤーたち。

今までいろんな戦場を駆け巡ってきたが、これほど危機感を感じる戦場は始めてだ。

死ぬかも知れない。

最強の座を奪われるかも知れない。

これで心躍らないのは難しい話だ。今にもここで誰かと撃ち合いほど昂っている。

自分も彼女の後を追うように待機ドームに入って装備を確認する。銃の手入れも万全だし、不足している物無い。

体調は――

――今までになく絶好調だ。

硝煙の匂いと銃声が鳴りやまない戦場は直ぐそこにある。

第三回BOB。稀に見るほど激しい撃ち合いが始まろうとしていた。

？

迫りくる銃を最小限の動きで躲して射撃を行う。

「ぐあっ!？」

相手はまさか自分が避けれるとは思っていなかったのだろう。反撃も予想せず棒立ちのままの所を二発の弾丸が撃ち込まれた。

そのあり得ない衝撃を受け敵は尻餅を付く。だが、彼もすぐ体制を

立て直そうと銃を構えるがそこに自分がいるわけも無い。後ろで銃を構えれば敵も気が付いたようだ。

だが、そう気が付いたときには大型ライフルのような重低音が鳴り響いたのだった。

「やつと一人か」

黒く光る拳銃を下ろし、マガジンを変える。

拳銃にしては銃身が長く、グリップもそれに合わせて長い。全体的に大きく、ズツシリと重量感がある銃——『ナイトシエード』をレツグホルスターに仕舞う。

これが自分の切り札の一つだ。

『ナイトシエード』はベレッツタ92FSと呼ばれる拳銃とM1911をハイブリットして造られた物であり、これを手に入れるために何度もみんなで迷宮に潜った。

そして、これが日本に行く前に餞別として貰った拳銃だった。

実質、これを使いきれぬのなら拳銃の中において最強と言わしめるほどの威力を持つ。

この『ナイトシエード』の特徴的な所は、357マグナム弾を扱うことができ、それを二十ラウンド入ることが出来る優れモノだ。

つまり良く使われるオートマチックのハンドガンを扱うように、マグナムと同じ威力を弾を撃つことが可能なのだ。勿論、反動を制御するためにSTR^{筋力}が必要だ。

逆にさきほど戦った彼の耐久力には目を見張るものがあった。あの距離でナイトソエードを銃弾に、それも二発も耐えきれるほどVIT^{体力}を持つていたとは驚きだ。

予選で使った『イマニシー7』だったらどうなっていたことか。

やはり持ってきて正解だったと思いつながら腰にあるポーチから薄べったい端末を取り出す。

本大会が始まってから、もうすでに三十分近くも経った。最初の『サテライト・スキャン』で見た時、カスパールは反対側の砂漠辺りにいた。進行方向からするとどうやら一直線に自分に向かっているようだった。

自分も一直線に向かって行くなか敵を探していたのだが、十五分ごとに見れる『サテライト・スキャン』二回目を見て確信した。

カスパールとの距離が順調に詰まっているなか、周りにいる敵が少なすぎる。否、避けているのだ。

寧ろ、自分とカスパールを当てるように誘導しているかのような動きを見せる者いた。

先ほどののは本当に運の無い鉢合わせのようなものだろう。彼にとって。

もし、このままのペースで行けばカスパールと鉢合わせるポイント
は――

「――都市だな」

このフィールドの中心でやり合うことになる。廃墟都市を舞台にしたフィールドであれば自分達にとって十八番。ホームグラウンドにも等しい。

自分達、『Frater^フnit^ラer^タni^ニty^{テイ}』は建築物や障害物がある場所ほど本領発揮できる場所だ。

つまり、自分にとって、カスパールにとって。どちらも最も戦いや
すい状況で闘うことになるだろう。

だが、こつちもあの時よりかは成長したとは言え、あつちはずっと
現役のままだ。戦法も手の打ちも分かり切っているが、ブランクの差
が出るかもしれない。

それに、もしかしたら戦闘スタイルが変わっている可能性も高い。

まあ、だからこそ面白い。

次の『サテライト・スキャン』までに目的地の都市まで足を進めた。

？

コンクリートの短い階段の上部、市街地からは見通せない位置にキ

リトと並んでうづくまり、シノンは今四度目の『サテライト・キヤノン』を待った。

右手に衛生端末も握り、右腕のクロノグラフを睨む。午前八時五十九分五十五秒。そろそろ、このバトルロイヤルも後半戦になっているだろう。

実際、今でも廃墟都市では銃声や爆発音が繰り返し響いている。そして、時間がジャスト午後九時になる。

端末のマップ上に白と灰色の光点がいくつも浮かび上がった。

「キリト、あんたは北からチェックして！」

この時点で他のプレイヤーには自分たちが組んでいると気が付いただろう。十五分以上も近接戦闘が続くことはほぼあり得ない。

そして、もう一つの高速で動きながら二つの点が並んでいる。

「シノン、これは俺達と同じように組んでいるのか？」

キリトが二つ点に触れると『Zamie』と『Casper』と表示された。他にも表示された名前と位置から察するに。

「いえ、多分、この戦闘音はこの二人ね」

先ほどから聞こえて来る銃声の正体が分かった。ザミエルだけでも脅威だというのに。それに同じスコードロンのカスパールもいるとは思いもなかった。

予選の時に噂になっていたが素顔を誰も見たことがなかった上に、まさかもう一人トッププレイヤーが来るとは思っていなかった。それに予選ではザミエルとは打って変わって、彼らの代名詞とも言えるバレット・カーブを一度も撃たなかった。

それも助長してか、誰もカスパール本人とは思わなかったらしい。が、今は本人だと良く分かっただろう。ザミエルと撃ち合えるのはGGOにそう多くない。自分もその中に入っているのかは直ぐ分かる。死銃を終わらせ、キリトも倒す。そして――

——というような雑念を振り払う。今は死銃に集中しなければ。もし、探している名前が両方ともこの街にいなければ、自分たちの推測が根本から間違っていたことになる。

いや。

「……………いたー!」

と叫んだシノンの声はキリトの声とシンクロしていた。町の中央にある円形建築物の外周部。絶好の狙撃ポイントで陣取っていた。

『銃士X』

「今この街にいるのは『銃士X』だけだわ」

シノンの囁きに、キリトも張り詰めた声で応じた。

「ああ、『ステイブーン』はいないな。つまり、『銃士X』が『死銃』だということだ。狙っているのは、多分……………」

キリトが、自分の端末に指を置く。示されているのは中央のスタジオからやや西に離れたビル上の光点——名前は『リリコ』だ。

『リリコ』が他の場所に動くには必ず『銃士X』の射界に入らなければならぬ。あの黒い銃で撃たれるまえに、死銃を阻止しなければならぬ。

「援護頼む」

「了解」

シノンもそれだけ答え、身体を浮かせる。銃士Xを狙える場所まですぐ移動し、シノンは両眼で視力強化スキル『ホークアイ』の補正により、朽ちかけたコンクリートに縁の奥にちか、つと光る物が見える。
「……………いた、あそこ」

間違いない、ライフルの銃口だ。

「どうやら、まだ『リリコ』が出て来るの待っているみたいだな……………よし、シノンは通りを挟んだ向かいのビルから狙撃体制に入ってくれ」

「え……………、私も一緒にスタジアムに……………」

思わず反論しかけたがキリトは強い視線で遮った。

「これが、シノンの能力を最大限に活かす作戦なんだ。ピンチの時は君がその銃で援護してくれると信じているから、俺は恐れることなくあいつと戦える」

シノンはその言葉に頷くこと以外何もできなかつた。キリトは微かに微笑みを浮かべると、腕時計を一瞥する。

「俺は、君と別れてから三十秒後に戦闘開始する。その時間で足りる

か？」

「…… うん、充分」

「よし、じゃあ、頼んだ」

そして、キリトは躊躇うことなくスタジアムの南ゲート目指して駆けていった。その細い背名が遠ざかるのを見つめながら、シノンは胸の奥に奇妙な感覚が生まれるのを自覚していた。

緊張？ 不安？ いや違う。これは心細さ？

何をバカな！

奥歯を噛み締め、強く自分を叱咤する。

私は、BOB本大会に優勝しこの世界で最強のプレイヤーになるという目的を達成するために、ただ合理的に行動するだけ。未知のシステム外能力で混乱させている『死銃』は速やかに排除しておきたいし、それまではキリトと一時的に協力するのもやむを得ない。

それに成功すればキリトは敵に戻る。次、遭遇したときは躊躇なくトリガーを引き、倒し、忘れる。

何故なら、もう二度と会うことはないのだから。

シノンは、あくまでも普段と同じく冷静に行動しているつもりだった。

しかし、心のかなりの部分がいつもと違う思考に占められていたのかも知れなかった。それを自覚した時にはもう遅かった。ビルの壁面の崩壊部をくぐる寸前、背筋を強烈な悪寒を感じ、振り返ろうとしたことすら出来ずに路面に倒れ込んだ。

——何…… どうして……!?

一体、何が起きたのか、すぐには分からなかった。

咄嗟に避けようと目の前のビルに飛び込みかけたのに、足が動かなくてそのまま棒倒しになったのだ。どうにか動かせるのは両目だけ。ダメージを受けた前腕部を確かめる。

腕に刺さっていたのは、直径五ミリ、長さ五十センチ程度、根本部分が高甲高い振動音とともに、青白く発光している。これは——
電磁スタン弾。

あの時、ペイルライダーを麻痺させた特殊弾と同じだった。今狙っ

ている銃士Xは違う。スタン弾が飛来したのは逆方向、つまり南から飛来してきたのだ。先ほど見た衛生スキャンで少なくとも自分を攻撃できるプレイヤーはいない。

理解出来ない。誰がどうやって。

その問いに答えたのは、言葉ではなく、両目で捉えることが出来た一つの光景だった。

明らかにそれまで存在したんかった、南に約二十メートル離れた空間にじじつと光の粒が幾つも流れ、まるで世界そのものが切り裂かれたように何者かが現れた。

——メタマテリアル光歪曲迷彩!!

光そのものを滑らせ、自身を不可視化するという謂わば究極の迷彩能力だ。

しかし、あれは一部の超高レベルのネームドM**o**bモンスターだけが持つ技だったはずだ。

ばさり。

と風に翻るダークグレーの布地がシノンの混乱極まる思考を遮った。完全に姿を現した襲撃者をシノンはただ啞然と見つめた。

羽毛のマントに、頭部を完全に覆う同色のフード。あの『ぼろマント』——

——『死銃』。

Seventh bullet

腕に付けられた簡素な作りの時計を見れば、そろそろ三回目の『サテライト・スキャン』が始まろとしていた。

私は、どうやら彼より先に廃墟都市に着いたようだ。老朽化が酷く進んでいる、今でもよく見かけるバーカウンターの後ろに身を隠し端末を見つめる。

残り三十秒。

端末を横に置き、銃の確認をする。スライドを引き、銃弾が引かかってないか。銃身に歪みは無いか。どこか緩んでないか。

私がこの世界^{CGO}に来て一番最初に使った銃。彼が使っていた物を譲り受けたものだ。

『ベレッタ 92』

現実世界でも幅広く復旧しており、銃など興味がある人なら形ぐら
いなら見たことがあると思われる。

それを、彼が私に使いやすいように改造してくれたもので、今でもずっと長く使っている。彼は他の銃が強いと言うが、やはり私は自分が一番使い慣れた銃が一番強いと思っている。

勿論、これはサイドアームだ。メインアームは横に立て掛けている
ボルトアクションライフルの『Rifle No. 4 Mk I』。

今では全く見ることも無い銃だろう。このような骨董品の部類に入る銃はマニアが多く、こぞって手に入れようとするので苦勞した。しかし、これは銃だ。戦争時に人をより効率的に殺そうと開発、改良された人を殺すための道具である。それをただ鑑賞用にしておくなど、愚の骨頂だと私は思っている。

最も、そんな理由で手に入れたわけではない。

確かにボルトアクションで装弾数も多い訳でもない。照準器も付
けられず、ピープサイトという近距離、中距離に適した照門が溝では無く穴になっているだけであり、視力強化にスキルを持つとしても六百メートルまでしか狙えない。

ならば威力が高いのかと言われれば、そうでも無い。一見、この近代化した世界において使い物になれないように思えるが、何も身体を狙った場合の話だ。

頭部ヘッドショットを撃つ、それだけの話である。

この銃であれば頭部を貫通するぐらいの威力は十分にある。私に掛ければスコープもいらぬし、何なら伏せずに当てることだって出来る。

こっちはまだ使ってない。大体がハンドガンだけで済んだからだ。

午後八時四十五分。

端末を開けば目の前に全体のマップがホログラムとして目の前に現れる。この街にいるのは……六人ぐらいか。草原から真っ直ぐこっちに向かってきてる点に触れると、『Z a m i e』の文字が浮かび上がる。

私の現在地と彼の現在地を考えるに、その中間地点にいる一人のプレイヤーが邪魔だ。そのプレイヤーもこっちを認識したところだろう。

マップと自身のいる現在地を照らし合わせ、撃ち倒すビジョンを思い浮かべる。

ビルの高さ、遮蔽物、風向、色々な情報を合わせて撃つのに最も適した場所を割り出す。

すると、その邪魔だと思っていたプレイヤーが少しズレた。

「あら、自分から撃ちやすい場所に移動してくれたわね」

そのプレイヤーも私を狙いやすい所に移動したのだろう。そのビルの上にいることを考えると、少し上の階に移動したようだ。

彼ももう少しで都市に入る。入ればそのまま中央で迎えられるようにしておかなければならない。

端末を腰のポーチに戻し、ライフルをコッキングしながら立ち上がる。そして、何の仕切りも扉すら無いバーから身を出して、狙いを付けたプレイヤーがいるビルを見る。

強化された視力によってビルの最上階より一つ前の階層で身を潜めているようだ。しかし、余程、日本のプレイヤーは間抜けだと見え

る。いや、ただソイツが間抜けなだけか。

銃身が見えてしまっている。

自然に上がる口角。そのまま直立でライフルを構える。

「まさか、曲げられるのはハンドガンだけだと思っ
ているのかしら？」
ハンドガンが曲げやすいだけであって、曲げようものならアサルト
ライフルだって曲げることが出来る。

しかし、それでも曲げられないのは一つだけある。この魔^{バレット・カーブ}弾を創
り出した彼でも無理だった。

スナイパーライフルだけはどうしても曲げれなかったのだ。

スナイパーライフルは遠距離にいる敵を銃撃するためを目的とし
て作られたもので、通常の銃と違って構造から弾頭まで違う物もある。

ゲームのシステム上、それだけは曲げれないようになっていた。
が、しかし、だ。

中距離ならシステム上曲げることが可能だった。そして、その曲げ
ることに適していたのがこの系統のライフルだった。

ビルに狙いを定める。もう既に弾道予測線^{バレット・ライン}が出ているはずだが
焦った様子も無い。

「真上がお留守よ、間抜けなビギナーさん」

トリガーを引く瞬間、通常持つ場所より、銃口に近い場所で持つて
いた左手を捻るように上向きに上げる。

彼女から発射された弾丸は緩やかな曲線を描き、老朽化したコンク
リートの縁を削るよういきりもりしながら、後ろに隠れていたプレイ
ヤーの後頭部を撃ち抜いた。

まさか、そのプレイヤーも撃たれるとは思っていなかったのだろ
う。いや、警戒を怠ったのが敗因だ。もしかしたら、が生死を分ける
ことだってある。

ライフルをコッキングして空薬莖を吐き出す。

キン。

という音という音が鳴ると同時に、目の前からゆっくりと影が見え
て来る。

待ち望んだ人物が来て、彼女はライフルを背中に背負いハンドガンをホルダーから抜きぬく。

彼もまた見覚えのあるハンドガンを持って近づいて来た。

まだ、プレイヤーがいる廃墟都市の中心で二人は一步、また一步と距離を縮めていく。そして、距離がハンドガンの必中とされる所まで近づき、お互いに銃を突き付け合った。

「懐かしいわね、こうして銃をアナタに向けるのは出会ったとき以来かしら？」

「これをホロウのヤツが見たら戸惑うだろうな」

「ええ、きつと——『仲間同士で争うなよ！』って、割って入ってくるでしょうね」

「アイツ、お人好しだしな。思い浮かぶよ」

二人は銃を突き付け合いながら笑い声を上げる。ある意味、他のプレイヤーにとっては絶好のチャンスだ。しかし、誰もその場に似つかわしくない笑い声を遮ったり、水を差そうなどいうプレイヤーはいなかった。

『ターゲットが見えなくても狼狽えるんじゃない。考えてみる、弾が真つ直ぐ飛ぶとは限らないだろ？』……最初、頭おかしいんじゃないかと思つてたけど、この言葉が全てに始まりだったわ」

「う、あ、あー……俺、そんなキザいこと言つたか？ 今思えば相当はずいわ」

顔を隠すように掌で覆い隠すザビエル。しかし、銃は下がることは無い。ブレもしない。少しぐらい動揺するかと思つていたが、そんな隙は見せなかった。

「他にも、いっぱいあるわよ？ 例えば——」

「——やめろ。やめてくれ」

結構、本気なトーンで言う辺り、思ったより効果はありそうだ。

まあ、彼にとって恥ずかしい言葉だったかもしれない。でも、あの時の私にとってはそれがとても救いになった。

恥ずかしい記憶から戻ったのか、少しそわそわし始めた。

「あー…… まだ、怒ってるか？ その、あの時のこと」

「…… ちゃんとした理由だと分かってたし、仕方無いことだって理解してる。でも…… 普通、最後の日に言うことじゃないわよね？

しかも、仮想空間で言うとかバカじゃないの？ 別れの挨拶は普通リアルですることよね？ 恥ずかしかったからとかじゃあ言い訳にならないわよ？」

「うっ、ホント言うようになったよな…… ごめん」

「いいわ、別に。これでキツチリと借りは返すから」

空気が変わる、銃を向ける相手を本当の意味で敵として認識することで、殺気に近い威圧が空気を重たくしていく。

「オーケー…… 勝負と行こうか。カスパール」

「私が勝つ。負けるのはザミエルだから」

お互いの銃から同時に発射された弾丸がぶつかり合った。

？

動け！ 動け！

シノンの脳からアミユスファイアに伝わる運動信号の出力がシステム的な麻痺状態を越えたのか、右手がじりじりと動き出す。

目の前で死銃は勝ち誇ったように例の十字のジェスチャーを行う。その間にシノンはようやくSMGのグリップを掌で捉えた。

GGOにも銃器のセーフティロックは備わっているが、殆どのプレイヤーがほとんどだ。シノンもその例外では無かった。

ついに十字を切り終えた死銃が、右手のマントの内側に差し込み、すぐに引き戻し始めた。シノンも痺れた右手でSMGを懸命に持ち上げて反撃しようとする。

まだ、間に合う。死銃は撃つ前に一度コツキングするはずだ。その一瞬を狙う――

――だが。

死銃がマントから引いた黒い拳銃が視界に入った瞬間、全身が麻痺とは違う、凍り付いたように動かなくなった。

円の中に、星。

黒い星。

黒星^{ハイン}。五十四式

なん………で。なんで、いま、ここに、あの銃が。

力を失った右手から、最後の望みであるSMGが滑り落ちた。

ぼろマントのフード内部から粘液の如く揺れ、どろろと滴り、内側から二つの眼が現れる。血走った白眼。小さな黒眼。散大した瞳孔のせいで。深い孔のように見える。

――あの男の眼。

五年前、北の街の小さな郵便局に拳銃をもって押し入り、詩乃の母親を撃とうとしたあの男。幼い詩乃が無我夢中で銃に飛びかかり、奪い、引き金を引いて殺した。

――いたんだ。ここにいたんだ。この世界に潜み、隠れて、私に復讐する時を待ってたんだ。

もう、右手どころか全身の感覚が失われていた。ただただ、闇の中に二つの眼と銃口だけ見える。

心臓の音が、やけに大きく聞こえた。いつそこのまま失神してしまえば、アミュスフィアの安全機構によって自動ログアウトできるのに、シノンの意識は途切れることなく黒星^{ハイン}のトリガーが引かれる瞬間を待ち続ける。

これは運命だ。逃れることはできない。たとえGGOをプレイしていなくても、詩乃はどこかでもう一度、この男に追いつかれていただろう。

無駄だったのだ。何もかも。過去を断ち切ろうと足掻いてきたことに意味など何もなかった。

そんな諦念の中に――。

ただ一粒の砂のような、小さな感情。

諦めたくない。こんなところで終わりたくない。だって、ようやく解りそうだったんだ。本当の強さの意味。あいつの傍で、あいつを見ていれば、いつか、きっと。

そして、関わりを持った……こんな私にでも笑いかけてくれるあの人に――

その思考を、ついに轟いた銃声が断ち切った。

何発も轟いた。どこを撃たれたかは解らなかったが、シノンは瞼を閉じて、自分の意識が消える瞬間を待とうとした。

しかし。

ぐらりと、体を揺らしたのは、目の前のぼろマント。そして、死銃とシノンの間に、まるで私を守るように立つ黒い影。

「――死銃。お前で間違いないな？」

Eight bullet

「キサマ……ッ!!」

マントの奥から見える赤い目が更に光を増したように見えた。それは正しく怒りを表しているのだろう。目の前に立っているザミエルに。

彼は間違いなくGGONナンバーワンプレイヤーと名高いザミエル。だが、そんな彼がなぜ私を守るようにしているのだろうか。

「カスパール!!」

彼がそう名を叫ぶと強化された聴覚から聞こえて来る風を切りながら近づくナニか。それが銃弾だと気が付いたときには死銃の左肩を掠める。

死銃はとつさに大穴が空いたビルに転がり込んだ。そこに牽制するようにザミエルがハンドガンとは思えない重低音のする拳銃を連射する。

逃げるならチャンスだ。目の前で私を守るように牽制している彼も私が逃げやすいように立ち回っているのが分かる。

どうして？

なんで？

そんな疑問が浮かび上がる中、逃げようとするが、それ以前に立つ闘志が根こそぎ奪われてしまっている。ザミエルには悪いがとてもじゃないが逃げれそうにない。

最早、思考らしい思考すらできず、目の前で死銃と撃ち合っているザミエルを見ていることしか出来なかった。

そんなシノンの左腕を誰かが掴み上げ、シノンの背中に掌を当てる。よろめく暇もなく、そのまま右肩のヘカートごと、二本の腕で抱えられてしまう。

直後、体が潰れてしまいそうなほどの加速感。あつという間の出来事に困惑しているなか自分を横抱きになっているプレイヤーを見る。

黒曜石のような瞳と、風になびく長い黒髪。

……キリ、ト。

呼びかけようとしたが、声が出なかった。少女と見まごう美貌に、あまりにも必死な表情が浮かんでいた。

？

間違いない。目の前にいるこのプレイヤーが『死銃』だ。本来の狙いとは大きくズレたがこうして相対することが出来たのだ。問題は無い。しかし、一つ言うことがあるとすれば。

「カスパールのヤツ、わざと外しやがったな」

まさか、あれで貸しは返したなどと言うつもりか。カスパールならば外さない距離であったろうに。貸しとはカスパールとの戦闘の時の話だ。

銃を弾き、彼女は抵抗出来るわけもなく戦い自体は自分が勝った。後はトドメを指すだけだった。しかし、その時に見えたこの状況にカスパールを無視して向かったのだ。

その時、後ろから武器を回収したカスパールが不服そうに追ってきたので、掻い摘んで依頼の状況を説明すれば、もう一戦する約束をして手を貸してくれるらしい。しかし、一度だけ。そんなもの彼女にとってどうでもいいらしい。文句を言いたい所だが、今は死銃だ。

未だ、ビルの大穴に身を隠しているであろう死銃を廃車の物陰から見つめる。道路の真ん中で腰を下ろしているのは隙だらけだが、後方に敵はいないことは確認している。

後は、側面だがビルが並んでおり撃たれること可能性は低い。

カスパールも一度きりの共闘だったから、次会うときは敵同士だ。少なくともこの戦闘が終わり次第は手を出してこない。

『ナイトシェード』をホルスターに戻し、腰の後ろで交差するように収められている二丁の銃を引き抜く。

『CZE CZ75』これもハンドガンに分類されるものだが、これにロングマガジンを付け弾数を大幅に増やしている。SMGほどの集

弾性は無いものの感覚としてはほぼSMGに近い。

そして、何よりハンドガンである。だからこそ、曲げやすい。

一向に出て来る気配が無いが警戒しているのか、それとも抜け道を見つけ奥に抜けていったのか。だとしても相手の実力が未知数なため下手に動くことは危険だ。

だが、俺達の前で遮蔽物に隠れようと、それは意味が無いに等しい。両手に持った『CZ75』を左側に持って行き大きく右上に流すように振りぬく。連射されて放たれた数十発以上の銃弾がひと塊で死銃が隠れたビルの大穴に吸い込まれていった。しかし。

「……おかしい。何故、何も反応が無い？」

確信に近いものを感じて堂々と大穴に近づけば、思った通りそこには誰もおらず自分が撃った銃弾と電子スタン弾が入っていたと思われるマガジンが落ちていただけだった。

その現状に思わず舌打ちをする。

「チツ、どういうことだ？　いつの間に消えた？」

目を離れた覚えは無い。ここから出るには必ず自分の視覚に出てこないといけない。しかし、死銃は跡形を無く姿を消した。

出し抜かれたことに怒りを覚えながら、死銃の実力の高さに舌を巻く。ヤツは自分と戦うような素振りを見せて、どうやったかは知らないが上手く自分をそこに縫い付けた。

勿論、自分も狙いの一人だと思ふ素振りを見せている。だが、今の狙いはあくまでも、キリトと逃げていった彼女——シノンということだ。

そして、もう一つ。

「はあ、まさかあの光剣使いが助っ人だったか……せつかくコイツを持って来たんだが意味無かったか」

彼女対策として持ってきたが、試合よりもお互いが本来の目的を達成するべく最終的には協力関係になる可能性がある。もしかしたらもう出会う機会が無いであろうプレイヤーとこの大舞台で闘って見たかったものだ。

とはいえ、今はそんなことを思っている場合ではない。

如何に彼女とはいえ、流石に人一人庇いながら戦うのは難しいだろう。いや、シノンもきつとスタンから解けているだろうから、状況的には有利だと思うが……。

「ホント、どうやって掻い潜りやがった？ これじゃあ、俺は元トップギルド所属とはいえ、名折れだな」

謎が残るが今は急いで彼女たちと合流しよう。死銃が姿を消した謎も、もしかしたら彼女が何かしら掴んでいるかも知れない。

「急ぐか」

まだまだプレイヤーが残っているが、気にしてはいられない。シノンをこうも執拗に狙うということは、少なくともシノンを殺せる準備が整っているということ。

ならば、これ以上犠牲者を出させるわけにはいかない。一度、マップを見たとき一人のプレイヤーが『DISCONNECTION』になっていた。これが、死銃の犯行であれば現実世界で一人犠牲者が出ているということになる。

言い難い胸騒ぎを感じながらその場から走りだした。

？

ザミエルが時間を稼いでいる間に逃げ出したキリトたちは無人営業のレンタル乗り物屋で三輪バギーが一台だけ走れそうな奴が残っているのを確認した。しかし、乗り物はそれだけでなく、四つ足の大型動物のウマが数匹繋がれていた。

それは、生きた本物では無く、金属のフレームとギア類を？き出しにしたロボットホースだった。

「馬は……無理よ。踏破力が高いけど……扱いが、難しすぎる」

三輪バギーも乗りこなせる者はほとんどいないが、ロボットホースはバギーの比ではない。キリトはシノンの言葉にすぐに頷くと、一台

だけ健在の三輪バギーに走り寄った。

エンジンを掛ける。シノンをリアスステップに乗せ、自分はシートに跨るやいなやアクセルをかけた。

「シノン、君のライフルであの馬を破壊できるか!？」

「え……」

ようやく痺れが薄れてきた右手で、左腕に刺さるスタン弾を苦勞して抜きながら、シノンは背後のロボットホースを振り返り、やっと悟る。キリトは、ぼろマント——死銃がああ馬で追ってくることを危惧しているのだ。

幾らなんでもザミエルが負けるなんて……と言いかけた言葉を飲み込む。もし、死銃がザミエルとは戦わず迷彩を使つて追つて来たら？ いや、もしかしたら負けている可能性だってあるんだ。

見えない相手にどうやって戦えというのか。

「わ…… 解つた、やってみる」

いまだ震えが残る両腕で、右肩から降ろしたヘカートを抱える。銃口を、ほんの二十メートルほど先に冷たく佇む金属馬に向ける。

照準せずとも、スキル補正だけで必ず必中する距離だ。後はトリガーを引くだけ。そのまま指に力を——

——がちつ。

トリガーが引けない。

「え……… なんて………」

何度やっても、引き金は溶接されてしまったかのように動きはしなかった。

「……… 引けない……… なんてよ……… トリガーが引けない………!」

自分の喉から漏れた声は、細く掠れた悲鳴だった。まるで、氷の狙撃手シノンではなく、現実世界の朝田詩乃が泣き叫んでいるかのような。

「シノン! 掴まれ!」

いきなり強く声が響き、同時に伸びて来た手が左腕を握つた。導かれるままキリトの胴を抱く。その直後、バギーは弾かれたように道路

へと飛び出した。

キリトがシフトペダルを蹴り飛ばすたび、ぐんっという加速感がシノンを引きはがそうとする。懸命に細い体にしがみつく。

たちまちトツプギアに達したバギーは、廃墟に甲高い咆哮を響かせながら、メインストリートを疾走しはじめた。

「くそっ、まだだ！ 気を抜くなよ！」

反射的に後ろを向く。破壊しそこねたロボットホースが飛び出すのが眼に映った。乗っているのが誰かなど確かめる必要もなかった。

不吉な鳥の黒翼のように、マントが大きくはためく。背中にライフルを背負い、両手で金属ワイヤーの手綱を握っている。馬の動きに合わせて体を上下させている様は熟達した騎手のようだ。

「なん……で……」

乗れるはずがない。それなのに、闇色の騎馬は路上に転がる廃車を滑らかに迂回し、時には飛び越え、バギーとまったく同じスピードで追いつがってきていた。

その姿は、もはや自分と同じプレイヤーではなく、シノンの中から溢れた恐怖の具現化とも思われた。

廃墟を貫くハイウェイには嫌がらせのように次々と障害物が現れ、バギーに限界の高速コーナリングを強いた。条件は追跡者も同じのはずだが、障害だらけのこのコースでは四つ足の機械馬にわずかなアドバンテージがあるようで、スムーズに廃車を回避して追い上げてくる。

その上、こちらは二人乗りだ。現状バギーの方が明らかに加速が鈍い。

距離がついに百メートルを切った、と思われた時だった。死銃が右手から手綱を離し、真っ直ぐこちらに向けた。握られているのは黒いハンドガン。『五四式 黒星^{ヘイシン}』
全身を凍りつかせ、ステップに伏せることもできずに、シノンは拳銃を凝視した。奥歯が震えて、かちかちと不規則な音をたてる。

音も無く弾道予測線《バレット・ライン》の真っ赤な線が指先に触れる。その直後、銃口からオレンジ色に発光し――

カアン！

と高い衝撃音を引きながら、致死の弾丸がシノンの右頬から離れた空間を通過した。ライトエフェクトの微粒子がちりちりと空間を漂い、頬に触れた。その瞬間、シノンはドライアイスを押し付けられたような冷たい痛みを感じた。

「嫌あああっ!!」

今度こそシノンは悲鳴を上げ、背後の死神から眼を背ける。

「やだよ…… 助けて…… 助けてよ……」

赤ちやんのようにぎゅうつと体を縮めて、弱弱しい言葉だけ繰り返す。死銃は、バギーに追いついてから確実に命中させる作戦に切り替えたのか、銃撃は止んだものの蹄の音がじわじわと大きくなる。

「シノン！ 落ち着け！ 俺たちには仲間がいる！」

仲間？ このバトルロイヤルで仲間なんているわけが……いや、守ってくれたプレイヤーがいた。あの時、助けてくれた人がいた。キリトの背中にうずめている顔を上げると、横から後ろと同じような機械の騎馬が駆けて来る。一瞬、ヤツかと怯んだが違った。

「——時間は稼ぐがこっちはコレの扱いに慣れてない！ 油断はするなよッ！」

それはとても見覚えのあるプレイヤーだった。ザミエルが銃を死銃に向ける。しかし、中々狙いが定まらないのか四苦八苦していた。

前は前で女性プレイヤーが必死な表情でロボットホースを制御しようとしている。速度が上がったり落ちたりしていた。まるで、ただ跨がっただけのような、そんな感じだった。

「分かっている！ 頼むぞー！」

キリトがそういうとザミエルはシノンを一瞥して、視線を死銃に戻し銃を構えた。